




特撮学ets・補記



～追加データ集～



anurito

---



# 目次

平成・令和生まれに捧げる特撮学	
平成・令和生まれに捧げる特撮学（解説）	2
戦闘員のいない悪の組織	3
巨大怪人の倒し方	6
悪の組織の途中参戦・途中退場	9
脳みそ大首領	11
超巨大怪獣の系譜	14
スペシウム光線の功罪	17
ピンクの時代	19
ジャミラのお話	22
少女アンドロイド	24
読書レビュー	
読書レビュー	28
小説編	29
マンガ編	32
特撮編	36
自作小説解説	
自作小説解説	40
「人喰い料理大作戦」	41
「泉より愛をこめて」	42
「絵画の刑罰」	43
「AIに負けるな」	44
「ニジュウ面相の別荘」	45
「新釈・漁師とおかみさん」	46
「びっくり妖怪大図鑑」	47
「火星征服団」	49
「嫁食わぬ飯」	50
「シースルー大作戦」	51
「赤ずきん再び」	52
「性器の怪物」	53

「サイクロプス大作戦」「最後のお化け坂」	55
「ニジュウ面相クロニクル」	56
「ランボ先生の休日」	58
「アケチ大戦争」	59
「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ	
「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ	62
「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その2）	63
「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その3）	64
「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その4）	65
「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その5）	66
「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その6）	67
「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その7）	68
「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その8）	69
「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その9）	70
「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その10）	71
「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（番外）	72
「行け！ ゴッドマン」怪獣ファイル	
「行け！ ゴッドマン」怪獣ファイル	74
グリーンマン・牛若小太郎・ヒューマン 怪獣データ	80
「うたう！ 大龍宮城」OP ファイル	
「うたう！ 大龍宮城」OP ファイル	86
眉村ジュブナイル 美少女軍団の全て	
解説	98
眉村ジュブナイル 美少女軍団の全て	99
「私の愛した極悪キャラクターたち」とは？	106
環境破壊なんて怖くない	
環境破壊なんて怖くない	110

平成・令和生まれに捧げる特撮学

## 平成・令和生まれに捧げる特撮学（解説）

好評公開中の「平成・令和生まれに捧げる特撮学」の追加補充データです。本編完成後、新たにひらめいた記事を私のブログの方で公開していたのですが、そのブログが無くなってしまった為、こちらの方に再録させていただきました。

ブログで公開していた記事以外にも、「スペシウム光線の功罪」「ピンクの時代」以下は、今回、初めて公開する追加の新ネタです。

## 戦闘員のいない悪の組織

悪の組織の下っぱの構成員たちを「戦闘員」と言う呼称で呼ぶようになったのは、「仮面ライダー」（1971年～）以降の習わしじゃないかと思われる。

では、「仮面ライダー」以前には、悪の組織には下っぱ組織員がいなかったのかと言うと、そう言う訳でもなくて、元々は、彼らは「〇〇（悪の組織名）団員」とか、忍者ならば「下忍」という風に呼ばれていた。

それが、「仮面ライダー」で、なぜ、急に「戦闘員」になったのかと言うと、「仮面ライダー」が多分にアクション要素の強い作品だったからだとも推察される。

本来、悪の組織の〇〇団員たちは、雑兵であり、戦闘以外にも、作戦遂行や基地警備などの雑役もこなす存在だった。ところが、「仮面ライダー」では、格闘アクションが見せ場となった為、ショッカーの下級団員たちも、親分の怪人が出陣する前の（ライダー相手の）前座の対戦相手、という役回りが強くなったのだ。この「下っぱ団員たちが最初にヒーローと戦う」というスタイルは、その後のヒーローものの定番となり、それゆえに、「仮面ライダー」以降のヒーローものでも、下っぱの団員は「戦闘員」と呼ぶのが定着していったのである。

それが、特撮ヒーローも増産されていくうちに、いつしか、この「戦闘員」という存在も邪魔になり始めたようだ。ストーリー性やリアルさを重視するほど、「戦闘員って、いらなくない？」って話になっていったみたいなのである。

その傾向が最初に現れたのは、恐らく、「宇宙刑事」シリーズ（1982年～）だったのではないかと思う。この「宇宙刑事」シリーズ自体が、実は、新しい変身ヒーロー像を作ろうとした、野心的な作品だったのだ。

これまでの変身ヒーローの戦い方が肉弾戦メインだったのに対して、宇宙刑事は、あくまで未来志向であり、科学性を前面に押し出して、銃撃戦とか、大型メカによる戦いなどがふんだんに盛り込まれていた。各話クライマックスの怪人との決戦シーンだって、亜空間に移動して、そこで戦っちゃうのである。これでは、怪人との決戦前の前座の戦闘員バトルだって、あまり必要なくなってしまったのだった。

そのせいか、「宇宙刑事」シリーズの敵組織（マクー、マドー、フーマ）にも下級戦闘員は存在したのだが、いまいち印象が薄い。「宇宙刑事ギャバン」（1982年）なんて、メイン怪人以外に、ダブルマンなんて準怪人キャラまで出てきたので、戦闘員のクラッシュャーは、ますます目立たなかったのだ。

このように、一方で「宇宙刑事」シリーズが放送されていた頃に、実は、別の時間帯で、ついに、戦闘員が全く居ない悪の組織が登場する事になる。それが、「星雲仮面マシンマン」（1984年）のテンタクルなのだ。

テンタクルは、下っぱ戦闘員が居ないだけではなく、怪人（アンドロイド兵士）たちも全員がほぼ同じ形をした、驚異の手抜き組織だった。だが、それもそのはずだ。テン

タクルとは、世界征服とかを目論む悪の組織などではなく、単に、ボスの天才科学者プロフェッサー K（演じるは、故・天本英世さん）のわがままを叶える事だけが目的の超私的な悪者一味だったのである。

そんな訳で、テナタクルは「戦闘員がいない悪の組織」をはじめて形にしてみせたのだった。もっとも、話の流れ上、何度か、下っぱの子分集団みたいなものが出てくる事もあった。彼らについては、あくまで「戦闘員」ではなく、ただの黒服の警備員たち（テナタクルに雇われた人間？）みたいな感じで、処理されていたのだった。

なお、「マシンマン」では、テナタクルのあと、オクトパスと言う、新たな悪の組織も登場するのだが、こちらも、基本的には、専属の戦闘員が居ない組織であった。ただし、オクトパスは「世界中の犯罪者の結託チーム」と言う設定だったので、回によっては、やはり、戦闘員がわりにギャング集団が出てくるような事もあった。

さて、「宇宙刑事」シリーズがひとまず三部作で完結すると、次は「巨獣特捜ジャスピオン」（1985年）と言う作品が始まる事となった。この作品の悪の組織の戦闘員が、又しても、画期的なアイデアを採用している。

「ジャスピオン」の敵組織は、宇宙人の混成部隊（マッドギャラン軍団）なのだが、さまざまな宇宙人の寄せ集めという設定であり、戦闘員に当たる下級隊員たちも、皆、出身星が違うらしくて、別々の姿をしているのだ。つまり、従来の戦闘員とは違って、全員が統一した容姿・コスチュームではなかったのである。本当に、色んな星の宇宙人で構成されていると言うリアルさを、きちんと表現していたのだった。ただし、その為、せっかくの独自の外観を持っていた宇宙人隊員たちが、ザコとして、あっさりと次々に倒されていくと言う、実に勿体無いようなシーンも多々、見受けられたのであった。

同じ時間帯の後続番組である「超人機メタルダー」（1987年）では、第1話が始まった時点で、敵組織（ネロス帝国）のほとんどの怪人がすでに揃っていると言う、さらに斬新な演出が採用されていた。こうやって、怪人たちが最初っから一杯いたら、彼らが戦闘員や雑兵役も担える訳であり、下っぱ戦闘員は要らなくなると言う寸法なのだ。

と、そのように思われたが、やはり、そこまで徹底するには無理があったらしく、やがて、「メタルダー」でも、戦闘員に当たる「軽闘士」と言うキャラが、ポツポツと台頭するようになったのだった。

「メタルダー」の次に始まった「世界忍者戦ジライヤ」（1988年）では、敵も味方も（世界中から集まった）忍者であり、メインの悪の組織である妖魔一族も、唯一の敵という扱いではなかった。妖魔一族の戦闘員に相当する「カラス天狗」は、常に3人1組の布陣を敷いていて、毎回3人しか登場しないと言う、これまた特殊なスタイルの戦闘員であった。

このように、戦闘員の在り方について、いろいろと試行錯誤した作品が続いている中、「仮面ライダー」のシリーズでも、ついに、戦闘員の居ない悪の組織が誕生する事になる。それが、「仮面ライダー BLACK」（1987年）の暗黒結社ゴルゴムだ。

ゴルゴムは、そもそもが、これから地球を征服しようとする悪の組織などではなくて、すでに人間社会を影から牛耳っていた秘密結社だったので、下級戦闘員なんて存在も要らなかった訳である。ゴルゴム怪人にしても、元より戦闘用の兵士などではなくて、人間を怪人へと進化させる事自体がゴルゴムの指針だったのである。

とは言え、ゴルゴムにしても、やはり、全く戦闘員キャラを出さないようにするのは限界があったようで、結局は、数回ほど、普通の人間らしき雑兵や、さらには、人型ロボット（24話・25話）、ゴルゴム親衛隊（49話）なんてものまで無理くり登場させて、時々、お茶を濁していたようなのだった。

そのあと、「仮面ライダー BLACK」の続編「仮面ライダー BLACK RX」（1988年）に出てきた敵組織・クライシス帝国では、再び戦闘員が配置される事となったのだが、前作の流れの影響もあったのか、従来の戦闘員のような活躍はあまり見せはしなかった。

それから、さらに時が経つ事となる。「超光戦士シャンゼリオン」（1996年）や「仮面天使ロゼッタ」（1998年）など、特定の戦闘員が出てこないように見える作品がいくつか散見されたあと、平成の新ライダー「仮面ライダークウガ」（2000年）が始まると、そこでは、とうとう、戦闘員と言う存在そのものがいっさい排除される事となったのだった。

だが、それも当然だ。クウガの敵は、悪の巨大組織ではないのである。古代人の殺人鬼集団グロンギ族なのだ。ここに来て、ようやく、戦闘員が居ない敵組織と言うのが、基本設定レベルで確立されたみたいなのであった。

そんな訳で、「仮面ライダークウガ」では、完璧なまでに、グロンギの戦闘員なんてものは出てこない。そもそもが、「仮面ライダークウガ」が、のちの平成仮面ライダーシリーズの基礎となるシリアス路線のドラマだったのであり、そんな作風には、リアリズムに欠けた「戦闘員」なんてキャラは似合わないのだ。

その後の平成仮面ライダーシリーズは、この伝統をずっと受け継いでいる。だから、平成仮面ライダーシリーズのほとんどの作品では、敵が大掛かりな悪の組織であっても、戦闘員っぽいキャラは、あまり登場しなくなったのだった。少なくとも、今日の仮面ライダーシリーズに関して言えば、戦闘員のいない悪の組織の方がすっかり主流となっている訳である。

## 巨大怪人の倒し方

第二次怪獣ブーム（1971～1974年）の頃の変身ヒーロー（等身大ヒーロー）ものには、必ずと言っていいほど、巨人タイプの敵キャラが登場した。それは、時には、悪の組織の首領であったり、大幹部であったり、あるいは、イベント回の目玉の敵役だったりもした。

やはり、等身大のヒーローもの場合は、巨大な敵キャラと言うのは、それだけでインパクトがあるし、見た目だけで十分に手強そうにも感じられるからなのであろう。仮面ライダー・シリーズでも、「仮面ライダー X」（1974年）では大幹部のキングダーク（身長26メートル）、「仮面ライダー ストロンガー」（1975年）でも最後の敵として岩石大首領（身長不明）と、二度も巨大ラスボスが登場している。

この巨大怪人と言うシチュエーションであるが、その歴史はなかなか古く、元祖ヒーローである「月光仮面」（1958年）の時点で、早くもマンモスコング（身長15メートル）と言う巨大怪獣が出てきた。言うまでもなく、これはキングコングのパクリだったのだが、本来が「悪い人間」と戦う設定だった月光仮面が、こんな巨大な怪物へと、バイクに乗って立ち向かう姿は、いささかシュールなのでもあった。

その後も、「ナショナルキッド」（1961年）には怪獣ギャブラ（身長不明）が、「ジャングルプリンス」（1970年/制作は1965年ごろ）にはアリの魔神（身長不明）と言った巨大キャラが登場して、等身大のヒーローと対峙するのだが、これが、やがて、「ウルトラ Q」（1966年）を經由して、「ウルトラマン」（1966年）を筆頭とする巨大ヒーローものへと、バトルの構図そのものが変わってゆく訳である。

さて、第二次怪獣ブームの頃の巨大怪人の倒し方には、なんとなくパターンがあった。それが、一言で紹介すると、「等身大ヒーローは、巨大怪人の体内へと潜り込んで、これを撃退する」と言うものなのである。

およその巨大怪人の正体は、大型ロボットであった。だから、そのような戦い方が可能だし、巨大ロボットの中に潜む操縦者さえ倒せば、この巨大ロボット自体も撃破できる、と言う理屈なのである。

前述した「仮面ライダー」の巨大キャラ、キングダークと岩石大首領も、この方法で倒された。「電人ザボーガー」（1974年）のジャンボメカ（身長120メートル）も然りである。「キカイダー01」（1973年）のジャイアントデビル（完全体の身長不明）は頭部だけの状態のうちに破壊されたが、完成していたら、やはり同種の方法で倒されていたのかもしれない。（原作マンガでは、ほぼ内部から壊されたとも言えそうな最期だった）同じ石ノ森章太郎マンガ繋がりだと、マンガ版の「サイボーグ009」のブラックゴースト団の総統（魔神像）も、ヒーロー（サイボーグ009）に体内へ侵入された後で倒されている。

「超人バロム・1」（1972年）の巨大化する敵ボス・ドルゲ（最大身長20メートル）は、生き物（？）なので、さすがに、体内に潜り込まれて退治されるような事はなかったが、しかし、「快傑ライオン丸」（1973年）では、大魔王ゴースン（身長24メートル）は、人間が変身した巨大怪人でありながらも、最後は、体の中に無理やり飛び込んだヒーロー（ライオン丸）によって、心臓を貫かれて、破滅していた。それまでのストーリーでは、さんざん、ゴースンの弱点は象牙であるかのようなフラグが立てられていたにも関わらず！

実は、この「巨大怪人の体内に入って倒す」と言うパターンは、第二次怪獣ブームから始まったものでもなかった。特撮ヒーローもので、最初に、この手法が用いられたのは、恐らく、「悪魔くん」（1966年）のペロリゴン（身長50メートル、もしくは80メートル）であろう。ペロリゴンも怪獣型妖怪だったが、食いしん坊で、ヒーロー（悪魔メフィスト）まで食べてしまったばかりに、最後は、内側から体に穴を開けられて、滅びてしまうのだ。同じ東映作品である「仮面の忍者赤影」（1967年）でも、甲賀幻妖斎の動かす巨大ロボット・金目像（身長45メートル）は、ヒーロー（赤影）の内部侵入を許したばかりに破壊されていた。「キャプテンウルトラ」（1967年）の、星獣バンデラー（身長40メートル）やバンデル巨人（身長30メートル）の退治法も、実質上、この「内部からの攻撃」の変形であった。

そして、東映作品では、この「巨大な敵を内部から倒す」と言う戦略がエスカレートするあまり、アニメ映画「グレートマジンガー対ゲッターロボ」（1975年）では、ついに巨大ロボット（グレートマジンガーとゲッターロボ）までもが超巨大怪獣ギルギルガン（身長70メートル）の体内に飛び込んで、その巨体をぶっ潰す事となるのだ。

これら東映作品に対して、円谷プロの特撮ものでは、「快獣ブースカ」（1967年）の怪獣イモラ（身長30メートル）にせよ、「緊急指令10-4・10-10」（1972年）の地底怪獣アルフォン（身長70メートル）にせよ、さすがに、動物である怪獣の体内に潜って、やっつけるような手荒なマネはしていなかった。ただし、「戦え！マイティジャック」（1968年）のビッグQ（身長55メートル）の場合はロボットだったから、やはり、しっかりと内部から爆破しているのだ。

なぜ、巨大な敵の倒し方は、このように、いつも、内側に入って攻撃する形になってしまうのであろうか。

思えば、我々日本人は、幼き頃、童話を聞かされていた時期から、「大きな敵は、中から倒せ」と言う戦法を知っていた。すなわち、「一寸法師」だ。豆粒のような一寸法師は、鬼（等身大）に飲み込まれ、その中に入って、これを撃退した。実は、この「敵を内側からやっつける」と言うアイデアは、私たちにとっては、ずっと古くから心に染み付いていたものなのであった。そう言えば、日本人の大好きな中国の物語「西遊記」でも、孫悟空は、よく、悪い妖怪の体の中に入って暴れて、その妖怪を降参させる、と言う戦術を用いていた。

この特撮ヒーローもので頻りに目にした「巨大な敵の倒し方」は、そもそもが、もっと、いにしえの時代から引き継がれていた伝統だった訳だ。

第二次怪獣ブームは終焉したが、その後も多くの等身大ヒーローものは作られ続けた。それらの新しい作品の中でも、たびたび、巨大な敵は登場したのだが、さすがに、「敵の

内側に入って倒す」のはマンネリと考えられるようになったみたいである。近年では、このような巨大怪人の倒し方は、まるで見かけなくなったのもあった。

## 悪の組織の途中参戦・途中退場

特撮やアニメのヒーローものは、同じ敵（多くの場合は、悪の組織）と全編を通して戦う作品と、1話完結方式で毎回違う敵と戦う作品の、大きく2タイプに分類する事ができる。前者の代表が「仮面ライダー」であり、後者の代表が「ウルトラマン」だ。1シリーズごとに、敵の組織が交代するような作品も、「仮面ライダー」パターンだと考えてもいいたろう。

しかし、数多い特撮・アニメ作品の中には、この2パターンが混合しているような作品も見受けられる。すなわち、最初は悪の組織と戦っていたのに、途中でその悪の組織が滅びてしまい、あとは特定の敵とは戦わない1話完結スタイルになってしまう作品とか、それとは反対に、最初は1話完結スタイルだったのに、中盤から常連の悪の組織が登場するようになる作品だ。

これらの変則パターンに当てはまる悪の組織を、昭和の作品に限定して、気付く限り、書き出してみよう。

### <途中退場した悪の組織>

パルタ星人（1966年「レインボー戦隊ロビン」）  
 バンデル星人（1967年「キャプテンウルトラ」）  
 ギロン星人（1967年「光速エスパー」）  
 ヤプール（1972年「ウルトラマンA」）  
 ゴドメス軍団（1978年「恐竜戦隊コセイドン」）

### <途中参戦した悪の組織>

国際ギャング連合（1964年「エイトマン」）  
 X帝国連合軍（1968年「リボンの騎士」）  
 吸血魔人クモンデス（1972年「好き！ すき！！ 魔女先生」）  
 サタン帝国（1976年「ザ・カゲスター」）  
 大魔王ガルバー（1976年「超神ビビューン」）  
 ヘラー軍団（1979年「ザ☆ウルトラマン」）  
 宇宙魔王（1981年「太陽の使者 鉄人28号」）  
 海槌一族（1985年「スケバン刑事」）

もちろん、これで全てなのではなく、平成以降も、「ウルトラマンG」（1990年）のゴードスや、「美少女仮面ポワトリン」（1990年）のディアブル、「妖怪人間ベム」（2006年）のダーナ・オシーなど、敵キャラが途中参戦したり、途中退場するような展開は、あちこちの特撮やアニメで見かける事となる。

近年の作品の場合は、これらの敵キャラの途中参戦・退場すらも、作品の原案が練られた段階から決められているケースの方が主流なのであるが、昭和の古い作品だと、作品のテコ入れ、いわゆる、番組の強化策として、唐突に、敵キャラの途中参戦や退場が採用される場合も少なくなかった。

その典型例が、「キャプテンウルトラ」のバンデル星人である。実は、「キャプテンウルトラ」は、バンデル星人編の終了後は、第2の常連の敵宇宙人（コミカライズではバルガン星人）が登場する予定だったのが、バンデル星人編の視聴率が振るわなかったものだから、それで、一貫した敵が出てこない「怪獣ぞくぞくシリーズ」へと変更されたという経緯があるのだ。

このように、特撮やアニメでは、敵キャラの登場形態ひとつに注目してみても、その背景にある思惑とかが垣間見える事もあって、なかなか面白いのである。

## 脳みそ大首領

悪の組織の大ボス（大首領）と言うのは、最初、その正体を隠している場合が多い。そして、実体が不明の段階では、眼（あるいは、単眼を強調した形態）だけを部下に見せている大ボス、と言うのも少なくないのだった。

アクマ族の大魔王ガルバー（1976年「超神ビビューン」）、恐竜軍団の恐竜魔王ゴッテス（1977年「恐竜大戦争アイゼンボーグ」）、ガイゾックの真の支配者（1977年「無敵超人ザンボット3」）、ネオショッカーの大首領（1979年「仮面ライダー」）、デスタークの総統タブー（1982年「大戦隊ゴグルファイブ」）、ネジレジアの邪電王ジャビウスI世（1997年「電磁戦隊メガレンジャー」）、インフェルシアの冥獣帝ン・マ（2005年「魔法戦隊マジレンジャー」）など。ゲゲゲの鬼太郎の宿敵であるバックベアードも、巨大な目玉の西洋妖怪王だった。

ほとんどの場合は、この眼とは、大ボス自身の本物の眼である。（つまり、大ボスそのものが巨大なのだ）なぜ、自分の目玉だけを外に晒しているのかと言うと、そこには、文字どおり、「睨みを利かす」と言う目的もあったのかもしれない。また、眼には「眼力」「目ぢから」「邪眼」などの意味合いも見いだす事ができて、まさに、眼こそは表に出すのには、もってこいの部位だったのだ。

ちなみに、ゴースン党の大魔王ゴースン（1972年「快傑ライオン丸」）は、口だけを部下の前でも見せていると言う異例パターンだったが、眼の場合と比べると、やはり、どこかユーモラスな感じがしたのは否めなかった。

さて、このような正体不明の大ボスたちでも、実際の姿が暴かれてしまうと、その本体と言うのは、脳みその形をしているケースを、よく見かけるのだった。

なぜ、大ボスが脳みそなのかと言うと、そもそも、脳とは肉体の司令塔だからであろう。その為、一番偉い（頭のいい）大ボスとは、イコール脳みそのイメージが当てはまりやすかったのかもしれない。実に単純な連想なのだ。

最初に、脳みそを悪の大ボス役に当てはめた作品が何だったのかは、正確には分からない。例えば、SF小説ならば、1943年の「ドノヴァンの脳髓」（作・シオドマク）あたりが、人を支配する脳みそキャラのハシリだったのであろう。海外の古い映画だと、「The Space Children（宇宙の子供）」（1958年）や「SF第7惑星の謎」（1962年）などに、脳みその形をした宇宙人と言うのが登場していた。ただし、「The Space Children」に出てくる脳みそ宇宙人は悪者ではない。

日本の作品では、まず、SF小説にて、脳みそだけの状態の悪のボスと言うのを見つけられる事ができる。1966年の「少年画報」掲載の「新世界遊撃隊」（作・矢野徹）に登場したファンタズマがそれだ。

続いて、マンガの分野では、「サイボーグ009」（作・石森章太郎）に出てきたブラックゴースト団の総統（1967年「地下帝国ヨミ編」）が、脳みそ状態の大ボスだった。もっ

とも、「サイボーグ009」では、0012と言う脳みそキャラが、すでに出演済みだったので、ブラックゴースト総統の方は、三人組の脳みそと言うスタイルをとっていた。

しかし、脳みそと言うモチーフがグロかったからなのか、映像作品では、なかなか、脳みそボスが採用される事はなかったようだった。「サイボーグ009」の劇場アニメ（1967年）でも、肝心のブラックゴーストのボスは、普通のコンピューターにと置き換えられていた。

ウルトラ怪獣のチブル星人なんて、実質上、宇宙人の脳みその怪物だったのであるが、形が前衛すぎて、脳みそのイメージは皆無だった。このチブル星人も、「ウルトラセブン」（1967年）で初登場した時は一侵略者に過ぎなかったものの、のちに、「ウルトラマンギンガS」（2014年）や「ウルトラマンタイガ」（2019年）に再出演した時は、立派なボスキャラとして、他の怪獣や宇宙人たちの上に君臨する事となる。

第二次怪獣ブームの頃から、ズノウ星人（1971年「宇宙猿人ゴリ対スペクトルマン」）やノウゲルゲ（1972年「超人バロム・1」）といった脳みそ型の怪人も、じょじょにテレビのスクリーンにも登場しだしたのだが、これらは大ボスではない。

その後、昭和の仮面ライダー全ての共通の敵である岩石大首領と言うのが現われたのだが、これを内部で操っていたのが、恐らくは、宇宙人の脳みそ（目玉付き）であった。（1975年「仮面ライダーストロンガー」）

「鉄人タイガーセブン」（1973年）に登場するムー一族の大ボス・ムー大帝も、古代ムーの時代から、脳みそだけの姿になって、生き永らえてきた存在である。「宇宙鉄人キョーダイン」（1977年）のダダ兵団を率いていたのは巨大ロボットの闇將軍ガブリンだったのだが、ガブリンに命令を下したダダ星のアルファタ・ダダーリン王は、すでに脳みそだけの状態になっていた。

ハワード・ロックウッド財団の主人であるマモーも、その正体は巨大な脳みそだった。これは、第130代マモーの脳みそである。（1978年「劇場版ルパン三世」）「無敵超人ザンボット3」（1977年）に登場するガイゾックも、その本当の支配者はコンピュータードール第8号と名乗る物体で、その名の通り、正確にはコンピューターだったのだが、外見は思っきり脳みその形をしていた。やはり、巨大な脳みそである。「太陽戦隊サンバルカン」（1982年）のブラックマグマでも、最後の最後に、真の黒幕として、全能の神と言うのが出現した。その正体は不明だが、少なくとも、見た目は人間の脳みそだった。

また、これは海外アニメであるが、「ミュータントタートルズ」（1987年）に出てくるディメンションXのクランゲ帝王も、実質上、脳みそタイプに分類できる悪の大ボスである。

とまあ、こんな感じで、かなりの割合で、脳みその形をした大ボスと言うのが存在するのだ。

やがて、TVゲームが普及しだすと、今度はゲームの世界で、脳みそ型のラスボスが頻繁に登場するようになりだした。「グラディウス」（1985年）や「メトロイド」（1986年）、「魂斗羅スピリッツ」（1992年）などの最終ボスがそうだったし、「グラディウス」の姉妹編である「沙羅曼蛇」（1986年）に至ると、一面のボス（ゴーレム）からして脳みそ怪物なのだ。これらの脳みそボスたちは、同ゲームの新作でも、よく再採用され

たものだから、結果として、最新のゲーム上でも、なおも、変わらぬ姿を披露し続けたのであった。

大ボスに限定せず、体の一部だけが印象的な脳みそ状になっていた怪人までピックアップしていくと、ハカイダーやサイモン・ライト、メタルナミュータント、顔のない悪魔、ダークブレイン、モジョ・ジョジョなど、それこそ、様々なジャンルの創作物から、該当者を見つけだす事ができて、もはや、キリがない。つまりは、脳みそと言う器官は、それだけ、クリエイターの想像力を掻き立てる体の部位だったと言う事なのであろう。

## 超巨大怪獣の系譜

日本の特撮ヒーロー界では、その始祖「月光仮面」（1958年）の時点から、早くも、等身大ヒーロー（月光仮面）vs 巨大怪獣（マンモスコング。身長15メートル）の構図を生み出していた。その後も、多くの等身大ヒーローが巨大怪獣と対峙した訳なのだが、やがて、「マグマ大使」（1966年）や「ウルトラマン」（1966年）などの巨大ヒーローが登場すると、巨大怪獣の相手はもっぱら巨大ヒーローが受け持つようになっていった。

しかし、ヒーローが巨人化すると、今度は、怪獣の方ももっと巨大化して、巨大ヒーローを等身大ヒーロー扱いするようなシチュエーションも、しばしば見掛けるようになっていったのだ。いわゆる、超巨大怪獣の出現である。

栄えある超巨大怪獣の第一号は、「ジャイアントロボ」（1968年）に登場したドロゴン（第21話「ミイラ怪人」）であった。ただし、ドロゴンは忍者怪獣の異名どおり、その忍法（？）を使って、一時的に超巨大化してみせたに過ぎず（ドロゴンの本来の身長は50メートル）、ヒーローのジャイアントロボを巨体で圧倒してみせるようなシーンもほんの僅かであった。

さて、設定上では、ウルトラマンの身長が40メートルなのに対して、ゼットンやアポラスなどの怪獣は身長60メートルとなっているので、これらの怪獣も十分に巨大な対戦相手になり得そうだったが、実際の映像上では、両者は同身長にしか見えなかった。このように、基本的に、怪獣図鑑などで公表されている怪獣の身長データは、超巨大怪獣かどうかの目安としては、まるで役に立たない。

次にはっきりとした超巨大怪獣をお目にできた作品は、「帰ってきたウルトラマン」（1971年）だった。その第23話「暗黒怪獣星を吐け！」の暗黒怪獣バキューモンは、明確に「怪獣」とは呼ばれていたのだが、その形態は、むしろ、ブラックホールのような天体現象を思わせるものであった。顔のある雲のようなデザイン画も残されてはいたのだが、それが映像上で使われる事もなく、視聴者にとっても、バキューモンはあまり怪獣っぽくは見えなかったのではないかと思う。

「帰ってきたウルトラマン」（1972年）では、第42話「富士に立つ怪獣」でも、富士山頂に乗っかるほどの巨体の怪獣パラゴンが登場したが、この巨大な姿は、実際には、蜃気楼による幻であった。（パラゴンの本当の体長は80メートル）続く「ウルトラマンA」（1972年）に出演したヒッポリト星人（第26話「全滅！ウルトラ5兄弟」）も、初登場時は200メートルもの身長で、防衛隊やヒーロー（ウルトラマンA）を怯ませたが、やはり、こちらも超能力で巨大な幻影を遠地に投影してみせていただけであった。（ヒッポリト星人の実際の身長は50メートル）

第二次怪獣ブーム（1971年～）以降は、特撮ヒーローも、およそ等身大ヒーローの方が主流となっていき、巨大ヒーローや巨大怪獣のたぐいは、ほぼ円谷プロの独壇場となっていったようだ。

そんな時代の流れの中で、1979年の「ザ☆ウルトラマン」では、ウルトラマンも、ついにマトモな形で、超巨大怪獣と対戦する事となる。そのお相手となった巨大怪獣が、第21話「これがウルトラの星だ！！ 第3部」の暗黒怪獣バゴン（身長938メートル）だ。「ザ☆ウルトラマン」に登場した怪獣は、総じて大きめだったのだが、その中でも、このバゴンは、シリーズ中盤の見せ場怪獣という事で、特に破格の大きさであった。

もっとも、「ザ☆ウルトラマン」は、実写ではなく、アニメ作品であり、アニメの巨大ロボットものに関して言えば、すでに、ギルギルガン（身長70メートル。1975年「グレートマジンガー対ゲッターロボ」に出演）や無敵戦艦ダイ（全長420メートル。1975年「ゲッターロボ」に出演）などの超巨大な敵がいくつも登場していた。アニメだったら超巨大な怪獣・ロボットも簡単に表現しやすいのであり、そういう意味では、アニメのヒーローものでは、他にも、多数の作品で、超巨大な怪獣やロボットが、頻繁に出演していた。

再び、円谷プロの作品の話に戻るが、1982年の雑誌グラビア作品「アンドロメロス」では、怪獣戦艦と呼ばれる超巨大怪獣群がぞろぞろと登場した。この作品は、主人公たちがすでに巨大ヒーロー、巨大宇宙人だったので、彼らが乗り込んで操縦する怪獣戦艦にしても、当然ながら、超巨大怪獣となった訳だ。グラビアならではの大胆な設定のキャラクターかと思いきや、「アンドロメロス」は1983年には実写化もされたので、動いている怪獣戦艦と、それと戦うヒーロー・アンドロメロスたちの勇姿も、きちんと映像で拝める事となった。（怪獣軍艦の身長は、ギエロニアが1313メートル、ベムズンが990メートル、キングジョーグが960メートル）

この「アンドロメロス」以降は、しばらくは、ウルトラマンや巨大ヒーローもの自体があまり制作されない、超巨大怪獣にとっても不作の時代が続いたようである。

その期間に制作された「電撃戦隊チェンジマン」（1986年）の敵軍の大將・星王バズーの正体は、全宇宙規模の侵略兵団の大ボスにふさわしい巨体であったのだが、その見た目はただの星（惑星型生命体ゴズマスター）であった。これは、分類的には、「ザ☆ウルトラマン」に登場した悪魔の星（第14話）の発展バージョンであり、「ウルトラマンダイナ」（1998年）のグランディアや「ウルトラマンガイア」（1999年）のモキアンと同系列の超巨大怪獣である。

1993年には、正規の特撮ヒーローものではないのだが、「ウルトラマンになりたかった男」と言う単発ドラマが放送された。この作品は、特撮ヒーロー番組において、そのものズバリ、超巨大怪獣をどう映像化するか、に取り組んだスタッフたちの物語で、本作の作中劇でのみの超巨大怪獣として、ゴッドキングが登場した。このゴッドキングを巨大に見せる方法としては、背景のスクリーンに写した巨大なゴッドキングの映像を、スクリーンの手前にいる着ぐるみのヒーロー（ウルトラマン）たちと戦わせる、と言う手法が用いられていた。

ただし、現実の話をする、この時期には、映画業界では、じょじょにCGが導入されるようになり出していた。1996年から、平成ウルトラマンのシリーズが始まると、そこには、CGを多用した怪獣がぞくぞくと登場して、各最終回のラスボス怪獣には、いずれも超巨大怪獣が採用される事となったのだ。

ちなみに、この平成ウルトラマン・シリーズにおける超巨大怪獣たちの中でも一番印

象深かったものを選ぶとすると、「ウルトラマンガイア」の中盤の見せ場に登場した巨獣ゾーリム（第26話「決着の日」）を真っ先にあげたいと思う。このゾーリムは、正統派の動物型怪獣でありながらも、あまりに図体がデカすぎて、巨大なワームホールからも頭だけしか出てこなかったと言う、実にユニークな演出で、その巨体ぶりをアピールしていたのだ。

こうして、その後の円谷プロが制作するウルトラマン関連のテレビドラマや映画などでは、ラスボスには超巨大怪獣が採用されるのが恒例となっていったようである。その全ての名称はここでは並べないが、とりあえず、2009年の映画「大怪獣バトルウルトラ銀河伝説 THE MOVIE」に登場した百体怪獣ベリュドラ（身長4キロメートル）こそは、超巨大怪獣のまさに決定版だったのではないかとも思われる。

このベリュドラは、単に超巨大であっただけではなく、直立した人間タイプの怪獣だったし、過去の無数の怪獣の合体キャラであった事や、最後の切り札のラスボス怪獣だった点など、実に、超巨大怪獣ならではの要素を全て兼ね備えたキャラクターだったのだ。

この究極の大怪獣ベリュドラ登場以降も、超巨大怪獣がヒーローものに出演しなくなった訳ではない。超巨大怪獣は、ラスボスだとか見せ場の大怪獣などとして、今なお、多くのヒーローもので重宝され続けているのである。

## スペシウム光線の功罪

〇〇光線と聞くと、その光線が直撃したターゲット（場所）が破壊ないし爆発してしまうようなイメージを抱いている人が多いのではないかと思う。

しかし、そもそも、「光線」そのものには、そんな攻撃的意味合いは無いのだ。光線とは、文字どおり、光の線（直線）の事であり、それ以上の要素は何一つ含まれていないのである。

我々がよく知っている光線の一つに、太陽光線がある。また、懐中電灯やスマホのライトも、立派な光線である。これらの光線を浴びたら爆発すると考える人はおるまい。しかし、聞き慣れない「〇〇光線」とかだと、すぐ破壊光線を思い浮かべてしまうほど、破壊光線の印象は強く世間に浸透しているようなのである。

全く、私たちは、なぜ、光線に対して、このような歪んだイメージを持つようになってしまったのだろうか。いや、破壊光線に限らず、透明光線、変身光線、冷凍光線、ミクロ光線、四次元光線など、光線と言う言葉の前に何かをつければ、その何かの現象を簡単に実行できてしまうほど、今日では、光線は、何でも可能な万能の存在にと化してしまっているみたいなのである。

もちろん、レンズなどで光線を収束させれば、高熱を作り出せるのは事実だ。幼い頃に、虫メガネで集めた日光で黒い紙を焼いてみて、その威力にワクワクした人も少なくはなかろう。だが、逆に考えれば、生粋の光線ができる事は、そのような熱を作る程度のものである。

破壊光線と同じぐらい有名な光線として、レーザー光線があるが、こちらも、基本的には、高熱を作る事で知られた兵器である。しかし、レーザー光線は必ずしも高熱を発する訳ではない。昨今、レーザー光線が一般の場所でもポピュラーに使われ出すと、熱光線としてのレーザーのイメージもだいぶ薄れてしまったようである。

そして、仮に、一昔前のイメージの高熱光線のレーザーだとしても、実は、それは破壊光線とは違うものなのだ。と言うのも、高熱の力だけでは、モノを破壊したり、ましてや、爆発させるなんて事は不可能だからである。高熱は、モノを燃やしたり、せいぜい溶かす事はできるが、爆破する事までは無理なのである。

まあ、ミサイルや投下爆弾ならば、標的を爆散させる事もあるだろう。だが、これらの兵器は、それら自身が爆発物だから、爆発しているのだ。また、標的が機械や乗り物などで、内部に燃料を積み込んでいれば、この場合も、やはり、衝撃を与えたら、爆散する事もある。いずれにせよ、爆発する為には、爆発物の存在が不可欠なのであり、光線を浴びれば、何でもかんでも爆散すると言うのは、実に非科学的な発想なのだ。拳銃の弾や火矢が当たったところで、普通は、標的は爆発まではしない。それと同じ話なのだ。

では、今日の破壊光線のイメージを最初に定着させたのは、何だったのであろうか?それこそが、どうやら、「ウルトラマン」(1966年)のスペシウム光線だったのではないかと考えられそうなのである。

何しろ、ウルトラマンは、テレビ番組では初の完全オリジナルの巨大ヒーローだっただけに、その基本設定はとことん、こだわり抜かれていた。従来の発想なら、ヒーロー関連の装備や環境などは、全て、ヒーロー名に合わせて、ウルトラ〇〇に統一してしまいたいところだが、そのような安易な妥協を、ウルトラマンでは行わなかった。だから、ウルトラマンの故郷はM78星雲ないし光の国だし、変身アイテムはベーターカプセルであり、胸に輝くシンボルの名称はカラータイマーなのだ。そして、ウルトラマンの最大の必殺技は、ウルトラ光線ではなく、スペシウム光線なのである。

銃や道具を使わず、自分自身の肉体から光線を発するあたりが、ウルトラマンは画期的であり、当時としては斬新だった。その光線も、レーザー光線とか破壊ビームなどと言った既成の呼称で呼んだりせず、スペシウム光線と言う独創的な名称を与えた点もオシャレなのだ。

ちなみに、スペシウムの語源は、スペース(宇宙)+〇〇ウム(元素の語尾)だそうである。作中の説明では、スペシウムは火星にある物質と言う事になっている。スペシウム光線の中には、このスペシウムが混ざっていたので、スペシウム光線と呼ばれているのだ。そして、このスペシウムこそは、あのバルタン星人の一番の弱点なのであった。ここに、ウルトラマンの必殺光線がスペシウム光線でなくてはいけなかった、しっかりとした理由があったのだ!

スペシウム光線が発射できる原理にも、何となく解説があった。それによると、ウルトラマンの両手はプラス(左腕)とマイナス(右腕)になっているのだそうだ。ゆえに、あの手を十字に構えると、スイッチが入って、スペシウム光線が放出されるのだと言う。もしかすると、このへんの設定は、電池のプラスとマイナスをイメージしていたのかも知れない。だとすると、スペシウム光線とは、ますます、懐中電灯の明かりみたいなものだった事になる。

スペシウム光線が爆発力を持っている点については、いぜん解明されてはいないのだが、もしかすると、スペシウム物質に爆発する性質でもあったのだろうか。例えば、電子レンジのマイクロ波のように。ただし、スペシウム光線を浴びても、爆発しなかった怪獣は多数いたし、他方、レッドキング戦やジラス戦などでは、ウルトラマンは、ただの岩ですらも、スペシウム光線で爆散させているのだ。

とにかく、科学的理屈は置いておいて、ドラマ的には、光線で敵を爆発させると言う演出は、たいそう観る者に迎合されたようである。よって、以後、ウルトラマンの眷族たちは、いずれも、エメリウム光線やらメタリウム光線、ストリウム光線などの自分独自の呼称の必殺光線を発射するようになり、やはり、当然のように敵怪獣を爆発させる事となったのだ。

いや、それだけでは済まなかった。必殺技で敵を爆発させるのは、それ以降は、特撮ヒーローやアニメヒーローの定番となっていき、光線に限らず、ライダーキックでも、必殺剣でも、あるいは、ぶん投げただけでも、それらの必殺技で敗れた敵は、ことごとく派手に爆死するようになってしまったのだ。

## ピンクの時代

戦隊ヒーローの紅一点のメンバーカラーは「ピンク」と言うのが、今や、相場となっている。それがあまりにも定着し過ぎたものだから、元祖・戦隊ヒーローものでは、逆に、紅一点にはピンク以外の色をあてがうようになってしまった。また、戦隊ヒーローの中に女戦士が複数いたケースもあったが、その場合、ピンクをあてがわれたのは、より可愛い系の女戦士の方であった。もっとも、もともと戦隊ヒーローの一人に選ばれるぐらいなのだから、ピンクの紅一点と言うのは、男勝りやお転婆キャラに設定されている場合の方が多かったのではあるが。

さて、今回、ここで私が指摘したいのは、このピンクと言う配色についてである。平成や令和の今でこそ、こんな風に自然に世間に溶け込んでいるピンク色であるが、実は、昭和の古い時代には、これほど万人に慣れ親しまれているカラーなのでもなかった。すなわち、当時（昭和40年代ぐらい）の日本では、ピンクはエッチな色として認識されていた時期があったのである。

いわゆる「ピンク」と言えば、それは性的な行為を想起させる色だと考えられていたのだ。ここで間違っただけではないのは、ピンク色そのものが猥褻なものに見なされていたのではないと言う点である。確かに、エロいものにピンク色が使われるケースは多かったが、それ以外のものにも、きちんとピンク色は使われていた。むしろ、「ピンク」と言う単語自体が、エロいもののように思われていたのである。

なぜ、その頃、ピンクが猥褻扱いされていたのかと言うと、恐らくは、成人映画（ポルノ映画）の事を「ピンク映画」と呼んでいた影響が強かったのではないかと思う。「ピンクサロン」なんて言葉（和製英語）もあった。つまり、ピンクの方こそが、マスメディアの勝手な命名による、とんだ被害者だったとも言えたのだ。

ちなみに、外国では、アダルト映画の事をピンク映画とは呼ばない。他国では、それらはブルーフィルムと呼称されており、ピンク映画とは全くの日本だけの俗称なのだ。

さて、そんな訳だから、当時（昭和40年代）は、一般的な場所や子供相手のメディアなどでは、ピンクと言う単語は、避けられる傾向が強かった。ヘタに「ピンク」の文字が出てくると、それだけで、エッチなギャグとかに思われてしまう懸念があったのである。それは、子供向けの特撮やアニメにおいても同じだったのだ。

例えば、「人造人間キカイダー」（1972年）では、敵ロボットの名称には色の名前を混ぜるのが定型パターンとなっていたのだが、ピンクを添えられたピンクタイガー（13話）は、あえて男の怪人であった。同じ薄赤系列の色のベニクラゲ（16話）やモモイロアルマジロ（24話）は、しっかり女怪人で、しかも、お色気要素もあったにも関わらずだ。なおかつ、ピンクタイガー本体の色も、ピンクと呼ばれている割には、それほど赤くはなかった。もしかすると、ピンクの女怪人では、アダルトっぽくなりすぎて、シャレにもならないと言う制作サイドの規制が働いたのかも知れない。

また、戦隊ものより古い集団ヒーロー「トリプルファイター」（1972年）では、女戦士も参加していたのだが、彼女にあてがわれたメンバーカラーはオレンジであった。（戦士名はオレンジファイター）やはり、ここでも、当時は、ピンクは意図的に外されているのである。

他にも、戦隊もの登場以前の集団ヒーローは、特撮でもアニメでも沢山いたが、その紅一点の体色（服の色）がピンクであるパターンは、まるで見かけなかった。ただし、ピンク色のヒロインが全く居なかった訳ではない。彼女たちは、あえて体色のピンクには触れられないようにしながら、少しお色気要素もちらつかせつつ、うまく存在はしていたのである。

1975年からは、ついに戦隊もの第一号の「秘密戦隊ゴレンジャー」が始まるのだが、この時の紅一点もピンクは名乗らなかった。戦隊ものの紅一点の第一号のメンバーカラーは、ピンクではなく、桃色であった。その名もモモレンジャーになったのだ。まあ、ほぼピンクな訳だが、それでも日本語の桃色が使われたのであった。もっとも、ゴレンジャーの場合は、メンバーの色は全員、日本語表記だったのではあるが。

ただ、実際の話をするれば、桃色だって、桃尻とか太ももなどを連想させる為、十分に色っぽいイメージの色ではあったのだ。しかし、それでも、完全にアダルト印象のピンクよりは、まだマシだったと言う事なのだろうか。のみならず、当時は、英文字の「H」だって、エッチ（スケベ）と混同されて、特別視されやすかったし、ハートマークだって、過度なラブ（つまり、性愛）の表現に使われがちだったのだ。全く、今日と比べると、あの頃は、本当に性的表現に過敏すぎた面もあったのである。

そんな中、「ピンク」が、急速に、日常的なものとして受け入れられるようになったのは、ほぼ間違いなく、アイドルユニットのピンク・レディー（1976年デビュー）の影響だったと考えられるだろう。

何しろ、当時を知る者としては、ピンク・レディーの登場は衝撃的だった。名前が「ピンク」なだけでもエロっぽいのに、彼女たちの衣装もホットパンツやレオタードなどで、露出度が高めだったのだ。私なんて、ピンク・レディーを初めて見た時は、こりゃあ、お色気狙いの一発屋として、すぐ消えるな、と思っていた。ところが、そうはならなかった。ピンク・レディーは、むしろ、健康的で爽やかなお色気として、世間に好意的に受け入れられる事になり、彼女たちは色物として消えるどころか、トップアイドルとして、何年にも渡って、テレビやスター業界を牽引する事となったのだ。

結果として、彼女たちは、過去の「ピンク」の良くないイメージを払拭する事にも大いに貢献したみたいなのであった。あくまで、それは、ピンク・レディーの数多い偉業のうちの、あまり気付かれない功績の一つだと言う事になる。

このピンク・レディーの快進撃と同時期に、もう一つ、エロでない「ピンク」を冠するものが流行っていた。それが、ピーター・セラーズ扮するクルーザー警部が出てくるコメディ映画「ピンク・パンサー」である。特に、日本では「ピンク・パンサー2」（1975年）がバカ当たりしていた。ピンク・パンサーそのものではなく、2（パート2）と言う部分がマネされるような奇妙な現象まで発生していたぐらいなのだ。この映画、元々のタイトルがPink Panther なのだし、邦題に「ピンク」が入っているのも仕方があるまい。だが、お色気ものじゃないコメディのタイトルが「ピンク」である事で、またまた、

ピンクの持つアダルト度を薄める事となったようなのだった。

戦隊ものに話を戻すと、「ゴレンジャー」が終了したあと、後継したのは「ジャッカー電撃隊」（1977年）と言う作品だった。この作品での紅一点の女戦士の名称は、ハートクイン。名前から色は消えたが、コスチュームはぼっちりとピンク色だった。この次の作品から、戦隊ものはスーパー戦隊と呼ばれるようになる訳だが、その作品「バトルフィーバーJ」（1979年）のヒロイン、ミスアメリカのコスチュームは、ピンク色のレオタードであった。

そして、その次の作品「電子戦隊デンジマン」（1980年）から、ついに紅一点の女戦士が、初めて「ピンク」（デンジピンク）を名乗るようになるのだ。時期的にも、まさに満を持してと言う感じだった。

この時期は、アイドル界でも、徹底した可愛い子ブリっ子を前面押しした松田聖子が台頭しだした頃（1980年に歌手デビュー）でもあり、彼女やその系列の当時の女性アイドルたちは、衣装でも歌詞でも、「かわいい色」としてのピンクをばんばんと採用して、ピンクの世俗化を大いに推進させていたのであった。

こうして、いつからか、戦隊ものでは、毎回、女戦士が「ピンク」のつく名前を名乗るようになり始め、それが当たり前ようになって、現在にと至っているのだ。

ピンク一つを取り上げただけでも、そこには、まさに、今日しか知らない人には分からないような歴史があるのである。

## ジャミラのお話

「ウルトラマン」に登場した怪獣の中でも、一般人の間でも認知度が高い人気怪獣の一つにジャミラ（第23話「故郷は地球」）がいる。ジャミラの独特な容姿を模して、着ているセーターを使って、ジャミラのマネをしてみた人もけっこう居るのではなかろうか。

さて、それほど有名な怪獣ジャミラであるが、実は「ウルトラマン」で初登場した後は、実写作品（バラエティ系は除く）では、ほぼ再登場した事がない。「ウルトラマンパワード」（1994年）にてリメイクエピソードが作られたぐらいなものだ。

しかし、それもそのはずなのである。なぜならば、ジャミラと言うのは、そもそも、普通の怪獣ではないからだ。元は人間だったのに怪獣になってしまったのが、ジャミラなのである。このジャミラと言う名前も、生物としての種族名などではなく、ジャミラが人間だった頃の個人名なのだ。

と言う訳で、こんなジャミラのオリジナルの出自を知っていたのならば、とてもじゃないけど、ジャミラをただの怪獣扱いにして、気安く使用などは出来ない訳なのである。

もともと、ジャミラは、当時の世界の宇宙開発競争（さらには背景にある軍拡競争）の犠牲者として考案された怪獣だった。だから、名前も、アルジェリアの独立運動家ジャミラ・ブーパシャから取られたものである。この二人のジャミラは、大国の横暴の犠牲になったにも関わらず、その事実を闇に葬られかけたと言う点で共通しているのだ。

そして、怪獣ジャミラのもう一つの特徴は、ロケットで地球外に飛び出した結果、宇宙での何らかの影響を受けて、宇宙飛行士が怪物化してしまい、その後、地球にと帰還する、と言う部分だった。このシチュエーションは、ウルトラマン・シリーズでは、「ウルトラマンA」の超獣ブロッケン（第6話「変身超獣の謎を追い！」）でも再使用されている。また、ウルトラマンダイナの誕生経緯も、よくよく考えると、同じパターンだったと見なす事ができるだろう。ジャミラでは悲劇そのものだった宇宙怪獣化現象も、その後の新ネタでは、怪獣化した人間も助かっており、必ずしも悲劇では終わっていないのだ。

また、この宇宙怪獣化現象と言うアイデアそのものも、実際には、ジャミラが初だったのではなく、それ以前に、外国（イギリス）のSFドラマ「原子人間」（1953年。さらに、1955年には劇場映画化）で披露されたものだった。怪物化した宇宙飛行士が、救済される事もなく、抹殺されて終わってしまう点も、ジャミラと同じである。「ウルトラマン」が放送されたのは1966年なので、「原子人間」の方がぜんぜん早いのだ。恐らく、ジャミラが出てくるエピソード「故郷は地球」も、この「原子人間」を下敷きにして書かれたものだったのであろう。（ジャミラの脚本を書いたのは、佐々木守氏）

また、外国では、「原子人間」以降も、地球に帰還した宇宙飛行士が怪物化してしまう映画として、「宇宙の怪人」（1959年）や「モンスター・ア・ゴーゴー」（1965年。監督

は、スプラッター映画の祖と言われる H・G・ルイス ) などが作られているのだが、恐らく、ジャミラの参考にはされてはいまい。

他にも、宇宙飛行士が怪物化してしまう作品としては、あのリック・ベイカーが特殊メイクを担当したホラー映画「溶解人間」(1977年)や、手塚治虫氏のマンガ「アトム今昔物語」(1968年)などがあるのだが、いずれも、ジャミラ以後の作品である。アメコミの「ファンタスティック・フォー」も、原作では、ロケットで宇宙飛行中にスーパーパワーを手にする設定となっているので、ジャミラの同族とも言えるのだが、初出は1961年なので、ジャミラよりも早い。

## 少女アンドロイド

近年の生成 AI やチャット GPT の進化の速さは、目を見張るものがある。そのせいか、最新作「超宇宙刑事ギャバンインフィニティ」（2026 年）に登場するアンドロイドのアギ（演・有坂心花）も、ひどく現実味のあるものにも見えてくるのだった。（2026 年時点）

しかし、よくよく考えてみると、アギの設定やキャラ自体は必ずしも斬新でもないのだ。過去の特撮作品やアニメなどを振り返ってみると、昔っから、少女アンドロイド隊員と言うキャラは、大体、こんな感じの描かれ方だった。「ウルトラマンマックス」（2005 年）のエリー（演・満島ひかり）しかり、「巨獣特捜ジャスピオン」（1985 年）のアンリ（演・塚田聖見）しかり、「レインボー戦隊ロビン」（1966 年）のリリしかり。比べてみると、性格面までソックリである。そう言う意味では、現実の方がようやく SF の理想に追いついてきたらしいとも言えるのだ。

そもそも、少女アンドロイド（基本的に美少女である）と言うキャラクターは、いつから創作の世界に登場しだしたのだろうか。

映画全般で考えてみると、無声映画の時代に早くも少女アンドロイドは出演している。それがドイツ映画「メトロポリス」（1927 年）のマリアである。まさに、少女アンドロイドとは科学のロマンであり、映画そのものと共に存在してきた賜物なのだ。

では、日本の特撮もの場合は、いつ頃から、少女アンドロイドと言うキャラは登場し始めたのだろうか？

調べてみると、実は、日本の実写作品での少女型ロボットの出演は意外と遅かった。どうも、昔の日本人のイメージでは、ロボットは人型よりも機械としてのインパクトの方が強かったらしい。古い作品に出てきたロボットほど、そんな感じのロボットばかりである。（「遊星王子」や「少年ジェット」を見よ！）

第二次怪獣ブームの頃のビジンダー（演・志穂美悦子）やロビンちゃん（演・島田歌穂）あたりは、さすがに第一号と見なすには登場時期が遅すぎるとしても、第一次怪獣ブームの頃も、少女アンドロイドと覚しきキャラはあまり居なかった。普通に判定したのならば、「ウルトラセブン」（1967 年）のゼロワン（演・小林夕岐子）こそが日本の特撮界の少女アンドロイド第一号と言う事になるのだろう。

しかしである。実は、「ウルトラマン」（1966 年）には「ジャイアント作戦」と言う未制作の劇場映画が存在していた。本来なら、この作品に出てくるユカリこそが、ウルトラ作品における少女アンドロイドの第一号だったはずなのだ。調べ出すと、少女アンドロイドの系譜はけっこう奥が深いようなのである。

皆さん、ちょっと忘れがちかも知れないが、そもそも、あのマグマ大使（1966 年「マグマ大使」）も広義的にはロボット的一种だった。となると、マグマ大使の奥さんのモル

( 演・應蘭芳 ) も当然、ロボットだと言う事になり、少女ではないものの、彼女こそが日本特撮界初の女アンドロイドだと考える事もできそうなのだ。(「セブン」のゼロワンだって、演じた時、小林嬢はすでに20歳を過ぎていた訳だし、このへんのキャラや役者の年齢に関しては、多少おおらかに考えてあげても良いだろう)

更に更にである。一見、少女アンドロイドとは縁の無さそうなゴジラ映画(1975年の「メカゴジラの逆襲」に出てきた桂(演・藍とも子)はサイボーグ少女)でも、実は1955年に書かれていた未制作シナリオの「ゴジラの花嫁」には、里子と言う名の女アンドロイドが登場予定だった。このシナリオは、もともと、ゴジラ映画の第3弾として用意されていたものであり、もし映画化が実現していたならば、この里子こそが文句なしに日本特撮界のアンドロイド少女の第一号になっていたはずなのだ。

なかなか正式作品化には漕ぎ着けなかったものの、日本の映像界では、かなり初期から少女アンドロイドを登場させようとする意志だけは存在していた訳である。

ここで、マンガやアニメに目を向けてみると、マンガで最初に少女アンドロイドが扱われたのは、やはり手塚治虫氏の「鉄腕アトム」(1952年)こそが本命と言う事になるのであろう。「アトムの妹・ウランちゃんをアンドロイドと呼ぶには、ややロボット感が強すぎはしないか?」と反発する人もいるかも知れないが、「アトム」の短編エピソードの一つ「白い惑星」(1963年)には、光子と言う少女アンドロイドが出演していた。彼女は、人間のフリをして生活し、その家族にすら正体がバレていなかったのだから、こちらは完璧な人間型アンドロイドだったと言えよう。さらに、人工細胞タイプのロボットである為、アンドロイドと呼ぶにはやや抵抗はあるのだが、手塚氏の初期作品「メトロポリス」(1949年)にもミッチィと言う美少女型の人造人間が登場していた。まさに、マンガの神様である手塚氏が、日本の創作界での美少女アンドロイドの先導者であった事だけは間違いないのだ。

続いて、小説の方面に話を移すと、SF界の重鎮・星新一氏の代表作からして「ボッコちゃん」(1958年)と言う少女アンドロイドの物語だった。それだけではなく、日本SFの祖と言われる海野十三氏の作品にすら、美少女アンドロイドが登場する「十八時の音楽浴」(1937年)と言う短編がすでに存在していたのだ。

とまあ、まさしく、映像、マンガ、小説など、あらゆるジャンルで、最初期から、日本では、少女アンドロイドと言うキャラは好んで扱われていた訳である。そのせいか、この少女アンドロイド役を演じる役者についても、有名人や期待の新人が抜擢されている事も多かったようである。なんたって、あの大河女優・綾瀬はるか嬢ですら、過去には、アンドロイド少女役を担当した事があったのだから。(2008年「僕の彼女はサイボーグ」)



読書レビュー

## 読書レビュー

長らく、私は、自分が読んだ本のレビュー（感想）を Amazon にのみアップ（掲載）していたのですが、最近になって、Amazon では、商品レビューを書ける為の資格（Amazon でそこそこの額の買い物をする）を設けるようになってしまいました。その為、私は、Amazon には、まるで読後感想が載せられなくなってしまいました。

よって、この Amazon の資格制度の施行以降（2025 年末以後）に、私が書きたくなった本のレビューを、仮の処置として、ここに掲載しておきたいと思います。

## 小説編

### 「家族八景」（筒井康隆・著）

この小説は、学生のころ、一度読みました。その後、最近、社会人になってから久々に読んでみたのですが、読んだ印象が当時とだいぶ違うものになりました。つまり、学生の時と異なり、大人の心理が分かるようになったからなのか、七瀬に心を読まれてしまった一般人の家族側の視線でも読めてしまったのです。

こうして、違う視線で判断しますと、七瀬って、かなりダーティ（悪質）だったなど言う感じもします。彼女は、自分の秘密（超能力）を隠したい為とはいえ、相手の事を発狂させたり、自殺に追い込んだりもしています。続編の「七瀬ふたたび」に至っては、念力で敵対者（悪人）を殺したり、超能力でズルをしてギャンブルで大儲けもしているのです。

七瀬は、自分（超能力者）を危険視して、普通人に迫害されるのが怖くて、超能力（テレパシー）を隠していた次第なのですが、本人はすでに十分に危険な存在になっていたようなのでした。

ちなみに、七瀬が家政婦の時に行なった、一番良くない行為は、年ごろの男の子の部屋を勝手に掃除しちゃった事でしょうか。（笑

小説における七瀬のキャラクターは、クールで知性的な美少女です。にも関わらず、私は七瀬を「かわいいドジっ子家政婦」のように思い込んでいたのですが、その原因は、どうやら、「ななこSOS」（by 吾妻ひでお）の名前の由来が七瀬だと言われていたり、ドラマ版（1986年）の七瀬をアイドルの堀ちえみが演じていたからだったようです。

### 「ラテンアメリカ民話集」（岩波文庫）

岩波文庫から発売されている民話集シリーズは片っぱしから買い集めていて、とうの昔に全部揃えたと思っていたのですが、2019年の今ごろになって、最新作のこの「ラテンアメリカ民話集」が発行されました。その事を知った時は、大いに悩んだのですが（私はすでに電子書籍メインで新刊を買うようにしていたので）、結局、紙の本で全てを揃えなかったのが、電子書籍も出ていたにも関わらず、あえて、本著は紙の本を購入いたしました。

もしかすると、今後も、いきなり岩波文庫の民話集の新作が発行される事もあるのでしょうか？

## 「ババロワさん 今晚わ」（舟崎克彦・著）

この童話「ババロワさん今晚わ」は、私が購読していた昔の「小学三年生」（小学館）に掲載されていた作品でした。

風刺のこもった、ダークなストーリー展開もさる事ながら、中盤に登場するダジャレの珍獣たちが、とてもよく記憶に残っていました。

最近、ネットで、この童話について紹介している文章を読んだのですが、私もひどく懐かしく感じてきたので、この度、この本を入手する事にいたしました。

ただ注意点がありまして、本作は数カ所の出版社から発売されているのですが、舟崎氏の挿し絵（つまり、ダジャレ珍獣たちのオリジナル版のイラスト）が載っているのは、この偕成社の本だけらしいです。私が手に入れられた偕成社版は、あいにく、表紙カバーが欠けていたのですが、でも、本体部分は全く支障はありませんでした。

舟崎氏の挿し絵は、完全に「小学三年生」に載っていた挿し絵そのままです。「小学三年生」の原形イラストでは、最後のカットに、友情出演（？）で、マンガ家の内山まもる氏が出てきたのまで、私は覚えていました。

ちなみに、ダジャレ珍獣なのですが、「小学三年生」バージョンでは、これまた、雑誌とのコラボ企画だったのか、特別に、「ウルトラ」と言う正義の虎も一匹、追加されておりました。

## 「明日への追跡」（光瀬龍・著）

光瀬龍氏のジュブナイルSFは、かっこいいタイトルのものが多いのですが、そのタイトルは内容を全く反映していないケースも少なくありません。この「明日への追跡」もその最たるもので、このタイトルからは、何となくタイムトラベルものを想像してしまうのですが、本編はまるで時間旅行などしません。このタイトルの意味がエピローグで分かった時は、思わず仰け反ってしまいました。

ちなみに、本作は、子ども向けの作品で、現代日本（当時としては昭和の1960年代）の日常生活が舞台でありながらも、登場人物たちが、それも主人公と同級生の学生たちが、次々に死んでしまいます。

この作品は、NHKでドラマ化もされている（NHK少年ドラマシリーズ）のですが、さすがに、日常生活の物語で顔見知りの人間が死にまくるのはマズいとでも判断されたのか、ドラマ版では、同級生は死ぬのではなく、記憶喪失になってしまう、という形に変更されております。

## 「都筑道夫少年小説コレクション」（本の雑誌社）

そう言えば、都筑道夫センセイの作品で「蜃気楼博士」をまだ読んでいなかったな、と思って、ネットで調べていたところ、この作品集を発見してしまいました。なんと、都筑センセイのジュブナイル（子供向け小説）の全集です。「蜃気楼博士」どころか、文

庫になってない作品まで読めてしまいます。

文庫にして十冊以上の分量ゆえ、そこそこの高額だったのですが、それでも、ほとんど迷わずに全巻揃いをヤフオクで落札してしまいました。

いやあ、買ってよかったです。都筑センセイの未読作品を、こんなにまとめて読めてしまうなんて！ なんだか、「三つ目がとおる」のオリジナル版大全集を買った時ぐらいの充実感、満足度がありました。

どの作品も面白くて、一つ一つにコメントしたいところだったのですが、都筑ファンでしたら、きっと、皆さん、似たような感想を持ったでしょうから止めておきます。連作ものとかは、かなり気になるような作品も多く、50年以上前に雑誌でこれらの作品を読んだ普通の読者の中には、あらためて全話通して読みたかったと思っていた人もいたのではないのでしょうか。

## マンガ編

### 「槐と優」（諸星大二郎・著）

作者いわく、「あもくん」の後続作との事なのですが、実際には「栞と紙魚子」と「怒々山博士」をくっつけたような内容でした。もう一つの連載中の作品「アリスとシェエラザード」よりも、伸び伸びと描けているような印象も受けました。

中盤でセミキャラが増えてから、がぜん盛り上がり出します。「栞と紙魚子」ではクトルー神話が使われていましたが、本作ではヴォイニッチ手稿が登場します。諸星センセイお得意の言葉遊び的なギャグも、相変わらず健在です。

### 「恐怖への招待」（松本正・著）

このマンガは、学生の頃に、喫茶店に置いてあったものを読んだ事があり、それ以来、ずっと、また読みたいと思っていました。ところが、いくら探しても、他所ではなかなか見つかりませんでした。「恐怖への招待」と言う書籍タイトルも、ほぼ覚えていたにも関わらず。

これまで見つからなかった原因は、実は、私が、この漫画の作者が（絵が似ていたので）さいとう・たかを先生だと勘違いしていたからなのでした。そりゃあ、さいとう氏の作品リストを調べても、見つかるはずがないのであります。

この度は、偶然ながら、本物が発見できて、さらには電子書籍でも購入できて、ほんとに良かったです。

全体的に、結末がどんでん返しになっている作品が多く、質の高い短編小説集のような雰囲気です。私のお気に入り、第一エピソードの「森の家」で、ラストのオチは、当時は、本当に衝撃的でした。

### 「アイアンマッスル」（永井豪・著）

私は、「バイオレンスジャック」の「ハイパーグラップル編」を先に読んだものですから、イーグルクロウグラン、スコーピオンバドー、フライングクロスマンの三体を見た時は、ちょっと照れくさい気分になってしまいました。（「バイオレンスジャック」では、この三人は、裸の美女を、寄って集って、なぶり殺しにしていたから）

本作「アイアンマッスル」は、永井氏の作品としてはマイナーな方ですが、少年マンガとしての完成度は高く、十分に楽しめます。前半の長編エピソード（デビュー戦）よ

りも、後半の国際トーナメントの方が面白かったです。エッチな場面も多く、永井マンガのスピノフキャラも色々と登場します。トーナメント漫画と言えば、「キン肉マン」が代表的ですが、本作はそれとも違った展開の仕方を披露しています。

「カスミ伝」シリーズ （唐沢なをき・著）

こんな私ごのみのマンガが存在していたとは！

いわゆる、マンガにおけるヘンな描き方（昭和の頃のギャグ漫画でよく見かけた、絵遊びみたいな描き方）を、どれもこれも寄せ集めてきて、毎回毎回、カタログのように紹介していった連作マンガです。

本作は電子書籍化もされていて、私も最初はそれで読んだのですが、このマンガの正しい面白さは紙の本でこそ堪能できますので、すぐに昔の紙のコミックスを買う事に。さらに、この本は文庫版も出ていたのですが、できれば大きなサイズの本で拝見したかったので、あえて、先に発行された単行本を買い揃えました。私の読みは当たっていたようで、やはり、単行本では、本文以外の表紙の部分でも、お遊びが施されていました。単行本は、紙質がやや悪いのですが、それも雑誌掲載版（原形版）っぽって事で。

回が進むほど、どんどんスケベキャラがエスカレートしてゆく小源太が一番おもしろかったです。ちなみに、この小源太と言う名前は、（作者も無意識で採用したのかも知れないけど）霞（かすみ）の小源太（by「サスケ」）が由来ですよ？

「ゆめかの日記」 （坂入カツユキ・著）

諸星大二郎氏や高橋葉介氏の往年の短編作品を彷彿させるようなショートホラー集。決して嫌いな内容ではないのですが、全体的にアッサリし過ぎていて、読み足りない感じもしました。

ちなみに、道路の立て看板を題材にした作品（第10話）がありましたが、これと同じストーリー構成のエロ小話を読んだ事があります。やはり、ホラーとエロと言うものは近い存在なのでしょうか。

「診える医師」 （藤栄道彦・著）

「妖怪の飼育員さん」の作者の新作マンガです。

これは面白い！ テレビドラマの原作として採用したら、きっと、オカルト風「ドクター X」みたいな作品に仕上がるんじゃないかと思うのですが、誰か、本作に注目したテレビ関係者とかいないんでしょうかね？

ちなみに、本作に登場する病気たちは、いずれも、前作「妖怪の飼育員さん」に出てきた疫病神系妖怪のような姿をしています。このへん、妖怪と病気の関係性を暗示して

いて、考えさせられます。

「彼方へ」 （諸星大二郎・著）

以前、私が Amazon のレビューでグチったら（「妖怪ハンター稗田の生徒たち」の文庫版でのレビュー）、諸星先生、こんな本を出してくださいました。これは、既刊ずみのマンガの新装版などに新たに追加した描き下ろしマンガばかりを再収録した作品集です。これで、諸星先生の新作一つを読みたいばかりに、重複した内容のマンガ本を買い揃えなくても良くなった訳です。

さすがは、読者の気持ちに寄り添ったマンガ家の諸星先生であります。ただし、新装版ばかりを買い揃えている読者は、こちらの「彼方へ」収録の未読作品を読む為にこの本を買うと、また重複しちゃう訳ですが。

個人的には、栞と紙魚子シリーズの未読エピソードをいっぱい読めて、うれしかったです。

「信長の忍び」 （重野なおき・著）

私が小学生の頃も、「マンガで読む日本の歴史」みたいな本は存在したのですが、読んで、それほど面白くは感じず、内容も記憶に残りませんでした。対して、この「信長の忍び」は実によく歴史の勉強になりました。単に笑えるだけではなく、一つ一つの出来事を分かりやすく説明し、敵側の情報なども詳しく解説しているからだと思います。おかげで、今までバラバラに覚えていた歴史上の事件が一つに繋がって理解出来るようになりました。NHK の大河ドラマなんかよりも、ずっと歴史を覚えられます。

このマンガは、アニメにもなったヒット作なので、今さら私が特記するような部分もないのですが、あえて言うならば、中盤からのストーリーはヒロインの千鳥もポロポロになってしまう悲愴な展開も多いので、むしろ、その辺のエピソードはアニメ化しない方がいいかな、と思いました。

ちなみに、私のお気に入りキャラは帰蝶姫。「麒麟がくる」の影響で、川口春奈をイメージしながら読んでしまいました。

「内山まもるウルトラ作品集」 （小学館）

内山まもる氏が、小学館の「小学〇年生」に載せていたウルトラマン漫画が単行本化されているのを見つけたので、さっそく購入。全4巻で、まともに買えば、7,000円はする代物だったのですが、ここは電子書籍のクーポンをフル活用して、ほぼ半額で入手。

この度の収録作品のうち、私が実際にタイムリーに読んでいたのは、「小学2年生」版の「ウルトラマンレオ」だけだったのですが、他にも、各巻の巻末付録の〈「小学〇年生」に掲載されていたウルトラマン記事〉も充実しており、ちょっとした「ウルトラ博物館」シリーズ（小学館）の出張版と言った感じです。

これで、私は、石川賢版「ウルトラマンタロウ」（小学館）に続いて、自分の学年度

の「小学〇年生」に掲載されたウルトラマン漫画は制覇した事になります。実は、あの「ジャッカル対ウルトラ兄弟」（「小学3年生」掲載）も、私はタイムリーで読んでいた世代なのでした。私にとっての第二期ウルトラマンのラスボスはジャッカルなのです。

## 特撮編

### 「東宝特撮全怪獣図鑑」(小学館)

この本は、発売当初から、いろいろと酷評されていまして、すぐには買うのは控えていたのですが、改訂増補版とかも、なかなか出そうにないし、とうとう思い切って買ってしまいました。

映画編の方は、各怪獣のデータを、現在の公式設定に統一したりせずに、その作品公開当時の解説をいちいち使っていたのが、まあ面白かったです。一方のテレビ編なのですが。

「円盤戦争バンキット」「メガロマン」の2作品が不参加。東宝の特撮でも特にレアものなのに。

「レインボーマン」。何か欠けていると思ったら、モグラートが紹介されていませんでした。「怪獣じゃないから」なんて言い訳は無し。ダッカー(戦闘機)やドクター・ボグ(博士)はしっかり紹介されているのだから。

「流星人間ゾーン」。この作品の怪獣(恐獣)には、どれも、きちんと身長・体重のデータがあったのに、いっさい無視。身長・体重こそ、昭和の怪獣の醍醐味なのに。ちなみに、「行け! ゴッドマン」や「行け! グリーンマン」の怪獣も、身長・体重は設定されていたようで。

「ゴッドマン」「グリーンマン」「牛若小太郎」の掲載を喜んでいる方もいたようでしたが、実は、これらの作品はCS(ファミリー劇場)で放送されたばかり(「バンキット」「メガロマン」も)なので、そこまで希少でもなかったのです。

やっぱり、今からでも遅くないので、改訂増補版を出しませんか?

### 「学年誌ウルトラふろく大全」(小学館)

「ウルトラ博物館」「学年誌ウルトラ伝説」(ともに、小学館)に続く、第3弾です。今回は、小学館の児童雑誌についてきた付録(ほとんどが紙製)のみの紹介に特化しています。また、これまでの2冊と異なり、本のサイズが一回り大きなものとなっています。

さて、その昔、私の住んでいた地域の小さな本屋さんでは、「10円のふろく」なるものが売っておりました。これは、児童雑誌についていた紙の付録のみをバラして(当時は、売れ残った本は、本そのものは雑誌社に返品して、付録は本屋で処分するシステムだったらしい)、10円の安価でワゴンで叩き売りしていたものでして、小さな頃の私は、これをオモチャ代わりに買ってもらって、たいへん楽しんでいました。だから、小

学館の児童雑誌についていた付録が一覧紹介された本誌は、とっても懐かしくて、ワクワクするのであります。

ところが、その割には、具体的に「ああ、持っていた！」と思える品物がなかなか見当たりません。雑誌本体を買っていたのだから、確実に持っていたはずの付録でさえ、なぜか、ピンとこないのであります。やはり、幼児期の曖昧な記憶なんて、しょせん、その程度のものなのでしょう。カネゴンの貯金箱なんて、かなり印象に残っていたのですが、本誌に出ていたものがそれだったのかは、イマイチはっきりしませんでした。

なお、特別ふろくで「ウルトラかいじゅう大パノラマ」（小1ふろく）の現物がありますが、これは「学年誌ウルトラ伝説」でも、すでに再録されていたものでしたので、ちょっと残念でした。



## 自作小説解説

## 自作小説解説

私がこれまでブログを書き続けていた理由は、もう一つ、自分が書いた作品（小説）を自分で解説したいからでもあったのです。

そんな訳で、適当な掲載場所がない自作小説の解説は、全部、ブログの方に載せてきたのですが、しかし、そのブログが閉鎖してしまい、結果的に、これまでに披露してきた自作解説も全部、消滅してしまいました。

ほんとは、それでお終いにしても良かったのですが、せっかく、このような「過去のブログの内容を転載する場所」を作った訳ですし、これらの私の自作小説の解説も、こちらで再録したいかと思えます。ただし、元となる作品自体が、すでに公開中止にしまったものも多いので、今でも読める作品の解説のみを掲載する事にいたします。

## 「人喰い料理大作戦」

正直言いますと、この作品は、単品の短編として考えると、完全に失敗作です。オチのくだりが、ほぼ連作ものの一本としか読めないからです。そもそも、トライアングル・シリーズが連作ものなのだから、各話を独立した話に見せたくても、その時点で難しいんですけどね。

それにしても、今回、共幻文庫コンテストに出品した2作品は、かなり締切ギリギリまで投稿を待ったつもりだったのですが、それでも受付順位は中ほどぐらいでした。受付順位をコントロールするのも、なかなか困難なのであります。

とりあえず、本作につきましては、先行して発表したトライアングルの前作（「ガラスの靴大作戦」「苦情の手紙大作戦」）と合わせて読んで下されませ。そして、現在、トライアングルの最新作の方も構想中なのですが、こちらに関しては、共幻文庫のコンテストには出品いたしません。

## 「泉より愛をこめて」

しょーもない「アリとギリギリデス」から始まったいずみちゃんシリーズですが、掟破りのアダルトビデオネタの「ビデオの中の彼女」を経て、「姪っこんぶれっくす」と、さらに「泉より愛をこめて」でテーマ的にほぼ完成する事となります。あとは「絵画の刑罰」や「いけない同級生」（未筆）など、また中身が墮落してしまうのでした。

「泉より愛をこめて」は、芸術的純愛を描いた小品で、絶対良い話だと思ったのですが、入選しませんでした。

原因を考えてみましたが、まず名画（アングル「泉」）を元ネタにすると言う発想が奇抜すぎて審査員に認めてもらえなかったのかもしれませんが。ヒロイン（蛙里いずみ）がオールヌードで出まると言う内容も、映像化しづらいと敬遠された可能性があります。角土なんてキャラクター名もふざけ過ぎと思われたのでしょうか。

まあ、色々と難点はあるかもしれませんが、それでも映像化、マンガ化してみせようと言う方がおりましたら、私の方は大歓迎なのであります。

## 「絵画の刑罰」

蛙里いずみの出演する小説は、大体においてアングルの絵「泉」が小道具として登場しており、思いつく限りのさまざまな使われ方をしています。

「アリとギリギリデス」ではヌードポスターと間違えられ、「ビデオの中の彼女」ではアダルトビデオの1シーンとして「泉」の構図が採用されます。「姪っこんぶれっくす」は「泉」に自分の姿を重ねてドキドキする少女のお話、「泉より愛をこめて」ではついに「泉」の制作現場を勝手に想像して、小説にしてしまいました。

いずみシリーズ最後の一本となる「絵画の刑罰」は、少し横道にそれまして、いたずら小僧たちが「泉」の絵を見て一度は思いつくようなジョーク、「泉」の絵にアンダーヘアを書き足しちゃおう、と言うテーマを取り上げてみました。ストーリー後半、さらに皆が思いつきそうなゲスな発想も採用しているのですが、あまりにも下劣すぎる内容ですので、「絵画の刑罰」はコンテスト出品は不可能そうであり、私のサイト内でのみの有料掲載とさせていただきます。

中盤における、絵画の人物総登場のくだり辺りは、けっこう面白く読んでもらえそうな感じもしたのですがね。

「泉」につきましては、その後、いずみシリーズではなく、お化け坂の新作「見えない叫び」で、もう一度モチーフとして使わせていただいております。この作品につきましては、いずれ公開したあとに、あらためて説明する事になるのではないかと考えられます。

## 「AIに負けるな」

そもそも、怪盗（ニジユウ面相）がお題を盗むと言うネタは、共幻文庫の昨年度コンテストの最後のお題向けに考えたバカ話でした。しかし、今年も共幻文庫がお題コンテストを所以说うので、勝手に記念作と称して、またニジユウ面相を登場させたところ（「笑いを盗む男」）、なんか、今年のお題コンテストも最後はニジユウ面相ネタで締めくくらないと収拾がつかなくなってきました。

と言う事を書いたのが、この「AIに負けるな」なのですが、ニジユウ面相シリーズはいつも特殊な書き方をしている為、本「AIに負けるな」に至って、もはやトンデモない内容となっております。現状では、これ以上、ぶっとんだ小説的仕掛けは私には閃いていません。

だから、もし共幻文庫が来年もお題コンテストをやったとしても、私は、流れとして、またニジユウ面相ものを書かなくちゃいけないのですが、困った事に、「AIに負けるな」を上回るアホ話を送り込むのは難しそう、来年もコンテストに参加するかどうかは、今のところ検討中なのであります。

## 「ニジュウ面相の別荘」

この小説は、もともとアットホームアワード向けに考えたネタだったのですが、「犯罪者のアジト」という題材は「アットホーム」じゃなかろうと判断しまして、ブックショートの方へ投稿いたしました。まあ、結果は落選したので、どちらに応募しようと同じだったのかもしれませんが。

お馴染みニジュウ面相シリーズの一本として、過去作はアケチ探偵視線で描いた話ばかりでしたので、この作品はニジュウ面相側の目線で書かせていただいております。

ニジュウ面相と大工の棟梁が、アジトに仕掛けるカラクリのアイデアをお互いに出し合うという内容なのですが、江戸川乱歩通でしたら、実は、ニジュウ面相が提案したアイデアはいずれも原作でも使われたものばかりだったと言う事に気付いていただけたら幸いです。

## 「新釈・漁師とおかみさん」

この作品は、作品冒頭でも記してあるとおり、グリムの童話「漁師とおかみさん」をリメイクしたものです。

原作は中世が舞台であるため、おかみさんが成りたい地位が王様だったり法王だったりして、現代人には共感しづらい部分もあったと思いますので、私の小説では、そのへんをモダンな地位に置き換えてみました。読者の皆さんも、おかみさん（妻）の視線に立って、どんどん偉くなっていく成り上がり気分を楽しんでいただければ幸いです。

もともと、私は最後のオチだけを書きたかったのですが、時代や小道具類こそ現代風のものに置き換えてはありますが、大まかな話の流れまでは変更していません。ただし、出来事に対する説明が違っています。

たとえば、原作のおかみさんはただひたすら偉くなりたかっただけですが、私の小説の妻は、新しい地位についても、その地位なりに悩みや不満点があるのが気に入らなくて、さらに別なる地位を望むのであります。原作で海が汚れていくのは象徴的なものでしたが、私の小説の場合は「妻の悪政のせい」とはっきりした理由を示しています。

つまり、一見、同じストーリーの流れなのですが、私の小説は原作とはところどころの解釈（特にオチの部分）が違っているのであり、だからタイトルが「新釈・漁師とおかみさん」なのであります。

この小説の鍵キャラとなる「物体」ですが、私は最初、未来から来たルシーの一体にしようと思っていました。作中、とうとう正体に触れませんでした。確かにそう考えたら納得がいくでしょう？ 裏解釈として、そう捉えていただければ幸いです。

また、この小説では、お遊びとして、日本の特撮ネタをあちこちに紛れ込ませていただきました。

陸に打ち上げられていた物体が死にかけていたと言うシーンも、実は「海底人 8823」を意識したものであったりします。（原作の魔法のヒラメは、漁師の旦那に釣られたのを見逃してもらっています）また、太陽系のエンペラーとか銀河連邦の盟主なんて肩書きが出てきますが、これらも特撮ものに出てきた肩書きで、特撮通で気付いた人でしたらニンマリしていただけたのではないのでしょうか。

## 「びっくり妖怪大図鑑」

先に白状しちゃいますが、見事に失敗作です。

お化け坂シリーズは、登場人物が二人のパターンが多く、どうもシチュエーションが似通ってしまいます。たいがいは、一人称の主人公に対し、もう一人の人物が魔性のものであるスタイルとなるのですが、「お化け坂を訪ねて」では、さらに意表をつくつもりで、一人称の人物の方を魔性めいた存在にしてみました。さらにパターンを変えるつもりで、この「びっくり妖怪大図鑑」は二人の会話スタイルを採用してみたのですが、どうも会話が上手に書きこなせず、裏目に出してしまったのです。

鳥山石燕のウソ妖怪に注目したアイデアや突飛な作品タイトルは狙いどおりだっただけに、実に残念です。と言っても、これが私の筆力って事なので、これ以上、書き直せそうにもない訳なのですが。

### 「びっくり妖怪大図鑑」登場妖怪一覧

赤舌  
 泥田坊  
 手の目  
 百々目鬼  
 大かぶろ  
 さざえ鬼  
 ぬらりひょん  
 狂骨  
 影女  
 目目連  
 天井くだり  
 あみきり  
 えんえんら  
 火間虫入道  
 白うねり  
 後神

(以下は、登場候補にあがってはいたけど、未採用だった妖怪です)

いやや

青坊主  
おとろし  
川赤子  
毛羽毛現  
天井なめ  
ぬりぼとけ  
野寺坊  
火消ばばあ  
ぶるぶる  
わいら

これらの妖怪の絵は、全て「鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集」（角川文庫ソフィア）や Wikipedia などで確認可能です。

## 「火星征服団」

発表前は「マーシャンウォー（火星戦争）」というモダンなタイトルで紹介していた作品です。それが、なんで、こんな昭和初期の小説みたいなタイトルにしちゃったかと言いますと、内容が明らかに近代SFではなく黎明期の空想科学小説っぽくなってしまったからです。

ウェルズの傑作SF「宇宙戦争」を、同作者の短編「水晶の卵」と結びつけた作品は数多いかもしれませんが、まさかの「星」とくっつけて話を展開してみせたのは、多分、この「火星征服団」ぐらいなものでしょう。

「火星征服団」という題名は、＜火星からの征服団＞と＜火星への征服団＞の両方の意味が込められています。ネタばれしますが、オチは「宇宙戦争」をパロっており、コンピュータ（人工知能）に支配されたテラ（地球）へ攻め込んだ火星人们は、生物のウィルスによってではなく、自分たちの所有するコンピュータをウィルスに冒されて、撃退される事になります。

かなり正編のストーリーからは脱線はしていますが、いちおう、ルシーものの外伝の一つです。

## 「嫁食わぬ飯」

2月（注・2017年）に金正男暗殺事件が大騒ぎになり、この時事ネタを急に冒頭の掴み部分で使用したくなって、やるなら今しか無いって事で、無理やり書いてしまった作品です。

もとは、「飯食わぬ嫁」と言う民話の題名を、「嫁食わぬ飯」と言い間違えたのがきっかけで発案したアイディアで、それだけでしたら、きっとボツネタにしていた事でしょう。

作中に出てくるキブンゴとは、ブラジルに伝承されている妖怪の名前です。背中に大きな口を持っていて、その口で子供を誘拐してしまうそうなのですが、イメージが「飯食わぬ嫁」の山姥と似ていたので、この名前を採用させていただきました。キブンゴが子種を奪うと言う小ネタも、この妖怪の性質からきています。

いちおう、ルシーものの一編扱いにはしていますが、ルシーや未来をあまり良いものとしては描いていません。

## 「シースルー大作戦」

いきなりですが、トライアングル・シリーズの新作を書かせていただきました。

そもそもは、「脱衣ゲーム」シリーズの元ネタとして、風間あいのグラビア「私の心もシルエット」を使う事を検討していたところ、すぐ「シースルー大作戦」というタイトルがひらめいてしまいまして、それで安易に、トライアングル・シリーズの一本にしてしまった次第です。

実は、「脱衣ゲーム」の方に収録した本作は、文章を若干、減らしています。「ルシーの明日とその他の物語」内に完全版を掲載しており、こちらを見れば、しっかりと、トライアングルものである事が分かるようになっています。

ゲストキャラのグリフィン博士は、さりげなく、没ネタ「悪の三博士大作戦」の中にも登場しています。本作「シースルー大作戦」は、「悪の三博士大作戦」の後日談のつもりなのですが、もちろん、「悪の三博士大作戦」とは無関係のものとして読む事も可能です。

せっかくのトライアングル復活ですし、シリー（sili）を出したり、お化け坂に触れたり、いろいろと小道具でも遊ばせていただきました。

ほんとは、もっとグダグダな内容にしたかったのですが、どうも、うまくまとまりませんでしたので、かなりマトモな小説になってしまった次第です。読者に話しかけるタイプの文章は、これまでも何本か書いてきましたが、普通の一人称よりも書くのが難しく、今回も、あまり満足のいく出来ではありませんでした。

## 「赤ずきん再び」

ここ最近、エロ小説ばかり書いていた訳ですが、この度、「小説家になろう」の「冬の童話祭 2019」に出品すべく、「赤ずきん再び」と言う、普通の小説を書かせていただきました。

これが、なんと、2年ぶりくらいの「狼ハンター」シリーズの新作です。このシリーズは、別に完結していた訳でもなかったのであります。

こうして、唐突に新作を書きましたのは、単なる気まぐれなどでもなく、実は「ピンクの怪物」の続編を書くに当たっては、そのストーリー内に「狼ハンター」のキャラも混ぜる事を検討していた最中でしたので、その前哨戦の意味合いもあったのでした。

なお、今回の「赤ずきん再び」は、紛れもない「狼ハンター」シリーズの1話ではあるのですが、シリーズ全般に出てくるアイテム、キャラはなるべく登場させないようにして、独立した1話として読めるような配慮を施してあります。「冬の童話祭 2019」の課題である「逆さ虹の森」の設定の方を大いに生かすようにして、若干、連載ものっぽい書き方に仕上げてみました。読者の予想を裏切る展開を心掛け、ラストシーンも、あえてボカした書き方にしています。また、毎度バラエティに飛んだ100年狼が、今回はどんな設定なのかも、見どころの一つとなっています。

## 「性器の怪物」

この「性器の怪物」という短編集は、そもそも、いまいちパッとしない「ピンクの怪物」を宣伝する目的で執筆しました。タイトルも「〇〇の怪物」と合わせています。

よって、内容の方も、「ピンクの怪物」本編から七大怪物の活躍シーンをそれぞれピックアップして、それに独立したストーリーを新たに添える、と言う手法をとりました。やっつけ仕事であり、七つのエピソードの大まかな筋書きも、一晩で発案してしまいました。

その為、夢ネタが四つもあるなど、各作品の類似っぷりが著しいです。お化け坂絡みも、最初は二作品だけにするつもりでしたが、最終的には、四作品にまたがってしまいました。

「口まんこ」 以前にボツにした太平洋ネタを採用したエピソードです。あえて怪談らしく、小泉八雲の「むじな」や「雪おんな」っぽい展開も投入しています。

「ペニス虫」 実は、この話は、完全に吾妻ひでおの短編マンガ「つばさ」のパクリです。読んで、気づいた方もいるかもしれませんが、作者自ら、こうやって白状してますので、盗作ではなくオマージュって事で。

「お尻が重い」 タイトルが先に閃きました。本シリーズ最初のお化け坂ネタです。「ピンクの怪物」では、セリフの中だけで説明したエロシーンを、きちんとした本編の形で書かせていただきました。

「山フグリ」 マンネリを避ける為、この話は昔話っぽく書いてみました。登場する兄妹のイメージは、チルチルとミチルです。山フグリのキャラ以外は、至ってマトモな内容に仕上がっています。

「乳房ボール」 メインの乳房ボールにふさわしい、全編異常ストーリーです。顔見せ程度にお化け坂が出てきます。オチの1行は、最初は無かったのですが、よくよく考えた末に付け加えました。

「夜歩く」 ほんとは「散歩する舌」と言うタイトルにしたかったのですが、オチが分かっちゃうので、今の題名にしました。ラストのスペクトルは、内容に物足りなさを感じて、途中で思いついたものです。

「性毛の呪い」 基本設定が他のエピソードと似過ぎている為、怪物目線のト書きとセリフ劇の合体、と言う文章構成で差別化を図ってみました。会話の中身から、この話の舞台がお化け坂である事が分かります。

さて、本作では、さりげなく、登場人物名でも凝ってみました。各話の主人公の呼び方が重複しないように配慮してみたのです。具体的には、次のような感じです。

「口まんこ」	彼
「ペニス虫」	少女
「お尻が重い」	私
「山フグリ」	兄、妹
「乳房ボール」	男
「夜歩く」	僕、妻、A
「性毛の呪い」	そいつ、連中

## 「サイクロプス大作戦」「最後のお化け坂」

サイクロプスと言うのは、私のエロ小説オムニバス「ハイスクール全裸」の方で、何度も登場させてきたキャラクターです。基本設定は「人喰い種族」なのですが、具体的なディテールには一貫性がなく、登場するたびに、そのキャラクターは変わっていました。繰り返し使っているうちに、作者の私自身が愛着を持ち始め、もっと掘り下げたくなりましたので、普通の小説であるトライアングル・シリーズの方にも出演させる事になりました。こうして、執筆したのが「サイクロプス大作戦」です。

もっとも、かなりの難産でした。トライアングル・シリーズでは、すでに「人喰い料理大作戦」という話も書いていましたので、食人ネタとして、色々と差異をつける必要もありました。オチや全体の構造は、早い段階でまとまっていたのですが、うまい構成ができなくて、かなり長い期間、構想のまま眠らせておりました。何とか書き上げた完成品では、当初、書き込もうとしていた「人喰い生物ネタのフィクションについての考察」や「トライアングル版サイクロプスの詳しい設定」などを、結局、ほとんど、はしょっています。

なお、序盤で、トライアングルの面々が、サイクロプスの都市伝説を披露しあう場面がありますが、これらの内容が、「ハイスクール全裸」に出てきたサイクロプスとなります。「最後のお化け坂」は、ついでに書かせていただいた<お化け坂>シリーズの最終回です。タイトルは「最後」なのに、実は、全ての始まりの物語である点がミソです。この題名は、「お化け坂を訪ねて」を書いた際も、候補にしていたタイトルの一つでした。今回の作品も、総集編の形式をとっています。

なお、作中で予知能力者・御船が最初に視る原爆被害の光景は、「坂道の多い場所」と言う事で、広島ではなく、長崎の方なのであります。

## 「ニジュウ面相クロニクル」

実は、最初に閃いたのは、「ニジュウ面相 対赤ずきん」と言う題名の部分でした。その方向で、ニジュウ面相シリーズの新作を書くつもりで進めていたのですが、その最中、何となく、「小説家になろう」サイトの過去の「夏のホラー」企画のお題に挑戦したい気持ちになってきました。結果として、これら二つの思惑が混ざり合い、「ニジュウ面相クロニクル」シリーズの誕生にと至った訳です。

「ニジュウ面相クロニクル」は、これまでのニジュウ面相シリーズの各エピソードを補完するような内容になっていますが、実際には、どれも、後から関連づけて、こじ付けたのでした。「ニジュウ面相クロニクル」シリーズの各話は、基本的に、お題の企画が開催された時期の物語という事になっています。だから、既成のニジュウ面相シリーズの各話の合間に組み込まれるスタイルになっているのです。

「不思議を探す男」は、2015年の「夏のホラー」企画のお題を使用しており、その為、既成のニジュウ面相シリーズの第1作「お題に生きる男」（2015年末）より以前の物語となったので、ゆえに、ニジュウ面相シリーズそのもののオープニングの物語という事にさせていただきました。のみならず、この題名は、続くエピソード「お題に生きる男」「笑いを盗む男」（2016年3月）とも、「〇〇男」と韻を踏ませていただいております。

内容につきましては、「学校の七不思議のタブーの七つめ」から思いつくオチを片っ端から紹介していく、と言う書き方を用いてみました。縮めの言葉も、きちんと後続作「お題に生きる男」を意識したものになっています。

「裏野ハイツ奇譚」は、2016年の「夏のホラー」企画のお題を使用した為、共幻文庫短編小説コンテスト2016ですでに展開していた既成のニジュウ面相シリーズと、時期がすっかり被ってしまいました。だから、単発エピソードであるのと同時に、「知ってる人だけのお話」と「AIに負けるな」（共に、2016年7月）の隙間を埋めるミッシングリンクのようなストーリーにもなっているのです。やはり、縮めのアケチ探偵のセリフが、「AIに負けるな」への布石となっています。

この作品では、新キャラとして、コバヤシ青年が登場しました。原典どおりの少年キャラにしなかったのは、ストーリー展開上の都合です。タイトルには、昔の小説っぽく、「奇譚」を使わせていただきました。また、「ニジュウ面相は誰だ?」（2019年9月）への伏線って訳でもなかったのですが、ニジュウ面相が女性にも変装できる事が、本編中でさりげなく提示されています。

「遊園地の怪人」は、2017年の「夏のホラー」企画のお題を使用した物語で、「ニジュウ面相の別荘」（2016年8月）から1年後の話である事が明記されています。本作は、いかにも原典の「少年探偵団」ものっぽいタイトルを付けさせていただきました。しかし、今回の主役キャラは、アケチ探偵でもニジュウ面相でもなく、何と、ナカムラ警部なのであります。

元ネタのお題では、遊園地をモチーフにした7つの課題も用意されていて、それらをサラリと流してしまいますと、「裏野ハイツ奇譚」と同じ構成になってしまいますので、きちんと7つ分のミニエピソードも書かせていただきました。ニジュウ面相が化けていたウサギのマスコットも、実は、お題に添えられていたイラストからイメージしたものであったりします。

2018年の「夏のホラー」企画のお題を使用して、ようやく「ニジュウ面相 対赤ずきん」も執筆されたのでした。表題は「ニジュウ面相 対赤ずきん」ですが、裏テーマは「狼男（洋ホラー）対人面犬（和ホラー）」にもなっているのです。さらには、本作は、ニジュウ面相ネタであると同時に、赤ずきんが出てくる「狼ハンター」シリーズの新作でもあります。

本作では、アケチ探偵ご本人は一切登場せず、代わりに、原典「少年探偵団」でもレアキャラのハナザキマユミが主演を務めています。あまり「少年探偵団」に詳しくない人では、元ネタが分からなかったかもしれません。しかも、コバヤシ君と年齢をひっくり返して、10歳ぐらいの少女キャラにさせていただきました。この設定は、けっこう気に入ってまして、「少女探偵マユミ」なんてスピンオフが書けないかな、と思ったぐらいです。

ふざけた表題であるにも関わらず、今回の作品は、かなり正統な推理小説っぽい内容になっています。本シリーズでは初の、きちんと謎解き推理するシーンがあります。また、街道を逃走する狼男のトリックは原典の二十面相の「黄金豹」からの流用だし、江戸川宝石店という名称は言うまでもなく江戸川乱歩が元ネタ、「ロマノフ王家の宝冠の大ダイヤモンド」と言うのも、原典において二十面相が最初に盗んだ、荣誉ある宝物です。（「怪人二十面相」）さらに、コミック「女探偵アガサ」も漫画「名探偵コナン」の題名パロディなのでした。ラストでコバヤシ青年が引用した言葉も、アケチコゴロウの言葉などではなく、実は、江戸川乱歩先生の名言だったりします。

## 「ランポ先生の休日」

この作品は、どちらかと言うと、「アケチ大戦争」よりも、それ以前のおふぎけニジュウ面相シリーズの流れをくんだ作品でして、このおふぎけシリーズでは、これまでも、ニジュウ面相、ナカムラ警部、ハナザキマユミ、と脇役キャラばかりを主演に使ってきましたが、本作では、とうとう、作者のランポ先生（江戸川乱歩）本人にも、ご登場していただきました。

内容は、ランポ先生の日常（休日）を追いながら、彼が、いろいろな身近なものから小説の着想を得ていく、と言うエッセイ風ストーリーとなっています。実話を元にしたかのような書き方をしていますが、ほんとは、中身のほとんどがフェイク（うそ）です。乱歩氏の作品自体から書き出したネタばかりですが、若干の真実も混ざっていますので、そのへんの実話と虚構の境目を楽しんでいただけたら良いかな、と思いました。

本作は、「アケチ大戦争」の途中に、番外エピソードとして挿入いたしましたが、これは、同作にて、今後、黄金仮面や少年探偵団などが登場する事への含み（予告）にもなっていたのでした。

## 「アケチ大戦争」

私になぜ、こんな作品（「アケチ大戦争」）を閃いたのかについては、ボツネタ集（「ルシーの明日とその他の物語」収録）の方に書いておきました。その時点では、この作品を本気で書くつもりはなかったのですが、その後、手軽で安価な電子書籍のおかげで、私は江戸川乱歩氏の小説を一通り読む事ができてしまいました。そうなりますと、「私以外のコアな江戸川ファンの方が執筆するのに相応しい」などとは言うおられず、発案者の私自身がやっぱり本作を書きたくなくなってしまった次第です。

本作を具体的な形にするに当たって、まず私が着手したのは、江戸川乱歩の全作品をチェックして、同じシチュエーションのもの同士でくっつけて、整理すると言うものでした。と言いますのも、江戸川氏の作品は、児童向けのリメイクものを除いても、やたらと同じアイデアやモチーフが使い回されていたのです。バラバラ死体とか、着ぐるみの虎とか、黄金仮面とか、気球による逃走とか。

私の「アケチ大戦争」は連作スタイルなので、これらを各エピソードごとにそのまま使ってしまうと、同じネタの繰り返しになってしまいます。そこで、私は、原作に忠実になるよりも、似たようなネタはどんどん合体させていって、あえて新しいストーリーに組み換えていった次第です。そして、この執筆方針のおかげで、原作とも違う色々なストーリーが生み出せていったのでした。

例えば、江戸川作品では、一郎と言う名前の人物がやたらと出てきます。このへん、一郎キャラをひとまとめにできないものかと考えた末に、「魔術師」と「暗黒星」の一郎が一人になり、そこから原作にはないストーリー展開が生まれた訳です。

こうやって、いじり始めますと、どんどん原作を改変したくなってきます。

その一つとして、一寸法師と言うキャラですが、原作では頻りに登場するので、「アケチ大戦争」でもぜひ採用したかったのですが、原作どおりの身体障害者で、それなのに犯罪者と言う設定にしてしまいますと、今の世の中では、何かと問題がありそうです。そこで、いっそのこと、この一寸法師には、SF的要素を取り込み、「人間じゃない」事にしてしまった訳です。

このように大胆なアイデアを一つ採用しますと、他のキャラたちだって、原作どおりでは少し物足りなくなってきました。こうして、二重体質のアケチ探偵（バトルシーンでは、特撮ヒーローみたいに変身させたかった）だとか、両手が義手の黒トカゲ（トカゲの尻尾みたいに、手を切り離して逃げる）だとか、本物の豹を連れ歩いている人間ヒョウ（これは、原作の設定を拡大アレンジした）だとかが、どんどん生まれていったのでした。それだけではなく、殺人芸術家の要素はクモ男一人に担当させたり、手品や催眠術を使えるのは魔術師だけと言うように役割分担させる事で、悪役たちのキャラや能力が重複しないようにも、かなり気を使いました。おかげで、ニジユウ面相は、化け物に

変身して、アケチと戦ってばかりの戦闘要員みたくもなってしまったのですが、これも実は、私が前から書きたかったアイディアの一つでした。と言いますのも、私は、ずっと以前から、二十面相が変身した怪人ときちんと肉弾戦でバトルする少年探偵団ものを書きたいと思っていたのです。その希望が、「アケチ大戦争」でようやく実現した次第です。

こうして公開しだした「アケチ大戦争」ですが、江戸川乱歩作品への知識量の違いで、それぞれの読者にはだいぶ印象が異なる作品となった事でしょう。

江戸川作品全てに精通している読者は、あちこちに散りばめられた元ネタを見つけながら、楽しんでいただけたら良いかと思えます。あんまり江戸川作品に詳しくない読者は、あとから原作を読んでみて、その違いに驚いてくれたら嬉しいです。もちろん、ここまで江戸川氏の原作を作り直してしまうのは原作への冒涇だと怒っている江戸川ファンの方もおられるかも知れません。私としましては、もっと自由で広い気持ちで、江戸川乱歩の世界観を楽しんでもらいたかったのではあります。

さて、この「アケチ大戦争」ですが、実はまだ完成していません。外伝の「少年探偵団編」を合わせても、ようやく半分ぐらいまでを書き終わったところです。そして、現在、休筆中なのですが、今のところ、続きを書くメドはたっていません。すでに最終話までのストーリーは出来上がっているにも関わらずです。

理由として、特に書きたかったエピソードやアイディアは全て、やり終えてしまいました。（正編と少年探偵団編の交差するストーリー展開だとか、昔と現代の少年探偵団の対比など）今後の内容は、まだ、特に新奇な書き方とかも思いついていませんし、本作以外にも書きたい小説とかがありますので、恐らくは、外部からの何らかの要因（他人からの続編執筆要請とか）がない限り、恐らく、本作の執筆が再開する事はないでしょう。もしかすると、未完で終わるかも知れません。

ちなみに、今、この「アケチ大戦争」と絡んだ新ネタといたしましては、「アケチ大戦争 戦国編」なんてものも頭に浮かべております。これは、本当に戦国時代の明智光秀の話で、もし、明智光秀が三日天下で終わらなかったら、どんな風に天下統一を進めていったかと言う内容になっております。私は、当時の戦国武将について、それほど詳しくないので、多分、このネタを書く事はないとは思いますが。

それともう一つ。「アケチ大戦争」は江戸川乱歩作品だけのオマージュでしたが、実は、横溝正史氏もけっこうな数の少年探偵ものを書いていたのでした。そこで、今度は、明智小五郎対 金田一耕助と言う設定で、両作者の作品に出てきた怪人犯罪者がクロスオーバーする作品も面白いのではないかと思いかけている今日この日頃なのでした。横溝作品がパブリックドメインになるのも、あと数年後です。

「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ

## 「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ

「妖怪の飼育員さん」（2015年～2025年）とは、藤栄道彦氏が描いたウェブ公開スタイルの妖怪マンガです。この作品には、多数のパロディネタが登場するのですが、特撮や古いマンガ絡みのパロディもかなり多く、気軽に読んでいると、それらのパロディを見落としてしまう場合も少なくありませんでした。

そこで、私としましては、気がついた範囲で、それらのパロディの元ネタを、特撮やマンガのものに限り、私のブログ内で解説してきたのですが、その肝心の私のブログの方が、「妖怪の飼育員さん」の完結前に無くなってしまいました。

と言うわけで、この度、その解説の数々を、最終回まで含めた完全版のものを、こちらにて改めて発表させていただく次第です。

なお、以下に載せたのは、旧ブログにおける解説ページの第一回の文面です。

### 「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その1）

藤栄道彦氏の漫画「妖怪の飼育員さん」（2015年～）の作中では、多数のパロディや時事ネタが登場します。

パロディに関しては、最初こそ、「古くても名作はネタが色あせなくて良いですわね」（第5話「小豆あらい」）とか「若いコ、わかるかねえ」（第17話「吹消婆」）などのツッコミで、それがパロディだと分かるような配慮がなされていたのですが、回が進むにつれて、畳み掛けるように時事ネタが連発されるようになり、それに伴い、小ネタのパロディについても、いちいち指摘されなくなっていました。（特に、第50話「マンドラゴラ」あたりから）

時事ネタがらみのパロディは、発表当時に読めば、すぐ分かるものばかりなのですが、時間が経ってしまうと、ピンとこなくなったものも多いかも知れません。しかし、それ以上に、作者の趣味なのか、特撮ものとか漫画のパロディが、「妖怪の飼育員さん」内には、ふんだんに盛り込まれているのです。

私が個人的に衝撃を受けたのは、第93話「白うねり」でして、妖怪・白うねりに怪獣ナース（特撮もの「ウルトラセブン」）の格好をさせたカットがあり、これなんて、特撮に詳しくない人は、パロディだった事すら、気が付かなかった事でしょう。

そんな訳で、この度、「妖怪の飼育員さん」の中に挿入されたパロディの中でも、特に特撮や漫画・アニメ関連のものばかりを、私が判明できた範囲で、定期的に、こちらで紹介する事にいたしました。「妖怪の飼育員さん」を再読する際の足しにさせていただければ、幸いです。

## 「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その2）

コミックス第5巻より

### 第53話「白負い婆」

最後のページが、まるまる、漫画「ブラック・ジャック」（by 手塚治虫）の一編「水とあくたれ」のラストシーンのパロディ。セリフや絵の構図まで、ほぼ完コピです。その為か、本話公開時は、ネットニュースで盗作扱いまでされていました。

そもそも、この作者さんは、「ブラック・ジャック」が、相当、お気に入りのようでして、この回の以前から、「ブラック・ジャック」を彷彿させるようなセリフや絵などが、ちらほらと散見していました。のちの第145話「白蔵主」なんて、全編が「ブラック・ジャック」の1エピソードのパロディとなっております。

### 第56話「ぬっぼり坊主」

妖怪・ぬっぼり坊主が憧れるアニメ（恐らくは、「ルパン三世」）の話も出てきますが、本話の最大のパロディは、そこではありません。

唐突に現れた平木さんのセリフ「その顔はなんだ！ その目はなんだ！ その涙はなんだ！」なのであります。このセリフは、実は、特撮もの「ウルトラマンレオ」（1974年）の中で使われた名セリフ（第4話）なのでした。ちなみに、このセリフをネットで検索してみても、きちんとヒットします。

「ウルトラマンレオ」がらみの小ネタとしては、他にも、第39話「九尾の狐（後編）」で、すでに、「ウルトラ念力」なんてワードが出てきていました。

## 「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その3）

コミックス第7巻より

### 第73話「蛟龍 その3」

モブシーンの1コマが、なぜかギャグタッチ。実は、このコマに出ている3人のキャラは、全員、漫画「パーマン」（by 藤子不二雄）の主人公の家族です。元ネタ内でも、同じようなシーンがあったかどうかは、私の勉強不足で、ちょっと確認できませんでした。

### 第76話「ちんちろり」

陸奥先生に「どっかで聞いたようなオチだな」と言われた締め言葉は、特撮もの「ウルトラセブン」のメトロン星人の回（第8話「狙われた街」）の有名なエンディングのパクリ。ちなみに、この「狙われた街」を監督したのは、第24話「屏風のぞき」にも名前が出てきた実相寺昭雄さんです。

### 第77話「砂かけ婆」

平木さんが口にした「心理学の天才がホテルで働く漫画」とは、作者の藤栄道彦氏の漫画「コンシェルジュプラチナム」。自分の漫画の話をしているものだから、他のキャラも、ツッコまないで、ただ呆れています。

### 第80話「煙々羅」

大源さんのセリフ「や～れやれだぜ」は、漫画「ジョジョの奇妙な冒険」（by 荒木飛呂彦）の主人公・空条承太郎の口ぐせ。「ジョジョの奇妙な冒険」を元ネタにしたギャグは、他にも、第52話「ぬらりひょん」の中などでも使われています。

## 「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その4）

コミックス第8巻より

### 第88話「三吉鬼」

本話の全編が、特撮もの「快傑ズバット」（1977年）のパロディになっています。妖怪・三吉鬼の「秋田では日本一」の設定を聞いたら、作者さんは、どうしても、このパロディを描きたくなってしまったのでしょうか。

昭和の特撮ファンでしたら、この回は、すぐに元ネタが分かって、ゲラゲラ笑えるのですが、今どきの読者は「ズバット」も知らないらしくて、ネットでそのような感想を見かけた時は、少しさびしく思いました。

コミックス第9巻より

### 第94話「猫南瓜」

本話のオチとなっている映画は、実際に存在する海外のB級ホラー映画のパロディ。あまりに有名な作品なので、あえて、ここには題名は書きません。

また、妖怪・コロボックルのレルラさんが口にした「昔のこわーい漫画」とは、短編「人くい一族」（by 古賀新一）のこと。少年チャンピオン・コミックス版「エコエコアザラク」の第19巻の巻末に収録されています。

### 第100話「疱瘡婆」

秘密結社「氏名指名団」は、特撮もの「愛の戦士レインボーマン」（1972年）に出てきた敵組織・死ね死ね団のパロディ。団員のコスチュームも、まるっきり同じです。

## 「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その5）

コミックス第9巻より

第101話「山精」～第104話「なめくじら」

確信犯のパロディだったのかどうかは分かりませんが、妖怪・山精のルックスが、マッドメンにそっくりです。この「マッドメン」は、諸星大二郎氏の漫画で有名ですが、それ以前に、実際に存在しています。

なお、山精を捕まえようとする大源さんの後ろには、はっきりと「サザエさん」のタマが描かれていました。

「妖怪と生物の未来を考える会」の会長がセリフを言う時、なぜか、ジョジョ立ち（「ジョジョの奇妙な冒険」）をしています。

「千年ガマ」というネーミングは、巨大怪獣と言う設定とともに、特撮もの「仮面の忍者赤影」（1967年）が初出。ただし、実際の伝承でも、千年生きたガマは変化するとされています。

陸奥先生の締めセリフは、「また医者っぽいセリフ」（大源さん談）どころか、完全に「ブラック・ジャック」の一編「ダーティー・ジャック」のラストのセリフの完コピです。この作者さん、ほんとに「ブラック・ジャック」がお好きなようです。

## 「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その6）

コミックス第10巻は、あからさまなパロディから「もしかしてパロディ？」まで、オンパレードです。

第105話「百々爺」は、最初の妖怪モブシーンからして「頭のとっぺんに毛が三本」「手塚治虫の漫画みたい」などのセリフが続出。妖怪・百々爺の脱走のくだりは、アニメ「ルパン三世」の第4話「脱獄のチャンスは一度」。陸奥先生も、露骨に「はかったナルパン！」と言っちゃってます。平木さんが言う「大人気妖怪漫画」とは、先の妖怪モブシーンで「やめろ、その歌は歌っちゃなんねえ」と言われたモノと同じです。続く「子供向け妖怪図鑑」と言うのも、恐らくは、水木しげる御大が編纂した妖怪図鑑のこと。

第106話「産女」の、大源さんと巨大赤ちゃんのやり取りは、「大悟郎」（時代劇「子連れ狼」）なんてセリフも出て来ますが、むしろ、漫画「どろろ」（by 手塚治虫）のどろろと子ども妖怪の組み合わせを彷彿させます。オチの部分は、わざと、特撮もの「仮面ライダー」の本郷猛と蛇口のエピソード（第1話）に合わせたのでしょうか。

第107話「手の目」では、またまた、「ウルトラマンレオ」の中より、伝説のジープ特訓（第6話）が使われています。

第108話「毛羽毛現」における、妖怪・毛羽毛現の合体した姿は、ほぼ、怪獣ヘドラ（東宝映画「ゴジラ対ヘドラ」）。ちなみに、ヘドラも合体怪獣です。

第109話「こそこそ岩」に出てくる借金取りの3人組は、実は、赤塚不二夫キャラのイヤミ、ハタ坊、デカパンをリアルに描き直したもの。彼らの事務所には「これでいいのだ」と書かれた額縁まで掛かっています。

第110話「夜釜焚」には、水木しげる漫画タッチに、平木さんがビビビビピンと平手打ちするシーンがありました。このビビビ叩きは、すでに、第84話「吸血鬼」の中でも使われています。

第112話「枕返し」は、さりげなく、コブラ（漫画「コブラ」by 寺沢武一）がモブ出演していますので、皆さん、そちらにばかり目が向いてしまっているようなのですが、実は、本話の一部が「ブラック・ジャック」の一編「気が弱いシラノ」と被っています。

第113話「ふくろさげ」には、「なんかいもよみがえるワニ」「破滅の刀」と、最近の大ヒット漫画（のパロディ）が二つも登場。どちらかと言うと、時事ネタと見なすべきか？

とにかく、パロディが絶好調の巻でした。

## 「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その7）

### 第120話「迷い家」

カラスの伝言「七国山」は、宮崎アニメ「となりのトトロ」に出てきた電報の文面。  
大林宣彦監督の「ハウス」（1977年）を「酷い映画」と評価した和桑久（わくわひさし）さんの名前の由来は、恐らく、NHKの子供向け番組「つくってあそぼ」のワクワクさん。

### 第129話「水虎」

陸奥先生曰く「特撮番組の悪の組織みたい」なGONの本部マークは、もろ「仮面ライダー」のショッカー。GONのメンバー（元「妖怪と生物の未来を考える会」）は、今回も、喋る時にジョジョ立ちしています。なお、念のために書いておきますが、「それが言いたかっただけですね？」と言われたオチは、童話の「ごんぎつね」です。

### 第130話「目目連」

特撮とも漫画とも違うのですが、本話のヒロインの名前「稗田野亜麗」は、「古事記」の暗誦者・稗田阿礼が元ネタ。なぜ、作者さんが、この名前をつけたのかは分かりませんが、漫画「妖怪ハンター」（by 諸星大二郎）の主人公の名前も、稗田阿礼が元ネタとなっています。

### 第150話「女夜叉（前編）」

鳥月さんと妖怪・雪女の寒菊さんの合言葉は、「お座敷小唄」（歌・和田弘とマヒナスターズ）の歌詞のモジリ。

## 「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その8）

コミックス第13巻に登場するのは、比較的分かりやすい有名作品のパロディばかりです。

第138話「ヴォジャノイ」では、妖怪・濡れ女の夕立さんが、「大人気キャラ」（漫画「鬼滅の刃」の禰豆子）に扮装。

第141話「ぬりかべ」で、亞さんが思い浮かべた「死合い」は、「空手バカー代」。それも、アニメのオープニングです。

第142話「首かじり」では、1コマギャグで、目玉おやじ（「ゲゲゲの鬼太郎」）や、「ククルス・ドアン」の島（「機動戦士ガンダム」第15話）が登場。また、わざわざ「世代的にわからない」「ぎりぎりわかる世代」と書かれている妖怪・首かじりのセリフの元ネタは、昔の歯みがき粉（デンターライオン）のCMの決め台詞。

第145話「白蔵主」は、全編が「ブラック・ジャック」の一編「古和医院」のパロディ。最後に「おまけ」の中にも、ねずみ男（「ゲゲゲの鬼太郎」）が、さりげなく出演しています。

## 「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その9）

難易度1の超メジャー作品のパロディあれこれ

第5話「小豆あらい」 陸奥先生の締めセリフは、宮崎アニメの「ルパン三世 カリオストロの城」。

第24話「屏風のぞき」 妖怪・屏風のぞきが車内覗きをする前に思い浮かべた妄想（マンガ絵）が富永一朗タッチ。

第31話「姑獲鳥」 旗に書かれた文字が「ばけものフレンズ」（「けものフレンズ」）。

第33話「加牟波理入道」 オチが、童話の「泣いた赤鬼」。

第40話「人魚」 平木さんが、完全に、喪黒福造（アニメ「笑ゥせえるすまん」）と化しています。

第47話「牛鬼」 「かわいそうなぞう」という有名な絵本のパロディ。

第66話「垢嘗」 妖怪・垢嘗を送り出す時の平木さんのセリフは、アニメ「あらいぐまラスカル」。

第89話「高女」 バスケをするシーンで、さりげなく、漫画「SLAM DUNK」の名セリフ。

第96話「幽谷響」 「特に意味のない画像です」というコメントの下に、アニメ「ヤッターマン」が描かれていますが、本当に「ヤッターマン」だけでは意味はありません。じゃあ、どう意味なのかと言うと……。

第125話「ダイダラボッチ」 妖怪・ダイダラボッチが、かめはめ波（漫画「ドラゴンボール」）を披露。

第133話「高速妖怪」 後半が、時代劇「必殺〇〇人」のパロディ。特に、エンディングは「必殺仕置人」。

第154話「山男」 夜の山中で、ゲゲゲの歌（「ゲゲゲの鬼太郎」）が聞こえているような……。

第160話「白骨夫人その4」 平木さんの登場シーンは、恐らく、「名探偵コナン」の怪盗キッド。

## 「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（その10）

第60話「太歳」から準レギュラー化した巨大妖怪・餓者髑髏は、その設定ゆえに、以後、登場するたびに、巨大ロボットアニメのパロディとして扱われるようになりました。

第102話「蝦蟇」での合体シーンは、まだ、巨大ロボットの合体シーン全般のパロディみたいな感じでしたが、その後の合体シーンは、いずれも、元ネタがはっきりしているものばかりです。

第126話「紅孩児」の合体シーンは、アニメ「マジンガーZ」（1972年）のオープニング。

第159話「白骨夫人その3」の合体シーンは、アニメ「ゲッターロボ」（1974年）のオープニングです。さらに、第160話「白骨夫人その4」でも、ゲッターロボのパロディは続いていて、餓者髑髏は、恐竜ゾンビ（元ネタの敵キャラも、改造恐竜）相手に、3種類の形態を使い分けて、戦います。（各コマの構図も、「ゲッターロボ」のオープニングそのまま）

第164話「ヒョウズンボ」では、餓者髑髏の登場シーンに、アニメ「機動戦士ガンダム」（1979年）のオープニングが使われています。戦闘シーンも、無理やり「ガンダム」のパロディをやっているので、その度にツッコミを入れられています。

第169話「孫悟空」で、餓者髑髏が変身しかけていたのが、アニメ「装甲騎兵ボトムズ」（1983年）です。

以上のように、餓者髑髏は、巨大ロボットアニメの名作古典を、順番に演じていった事になります。

## 「妖怪の飼育員さん」のパロディの元ネタ（番外）

おまけ。私には元ネタが全く分からなかったシーン

### 第 111 話「札返し」

妖怪・札返しがぺちぺちぺちぺちと大源さんを叩くシーンは、恐らく、何かのパロディ。

### 第 116 話「歩く二宮金次郎像」

最後のシーンで、大源さんの机の上に仏像が置かれていたのが、どうも意味ありげ。

### 第 136 話「倩兮女」

鳥月さんが「こういう展開、昔のゲームであったような」と言っていますが、多分、有名な TV ゲームで、そんな名シーンがあったのでしょうか。私は、マイナーな TV ゲームでばかり遊んだもので、人気作の話はちょっと……。

### 第 137 話「坊主狸」

平木さんが、悪い顔で「仕事」のことを語っているのに対して、「なんのセリフですか、そりゃ？」というツッコミが入っていますが、何かの漫画のセリフの転用だったのかも知れません。

### コミックス第 14 巻・電子限定特典

鳥月さんが「モンスターを料理して食べるアニメ」の話をしていますが、私は近作アニメには疎いので、これも具体的な元ネタは割り出せませんでした。

これらの元ネタが分かった方は、ぜひ、コメント欄の方にご一筆ください。

「行け！ ゴッドマン」怪獣ファイル

## 「行け！ ゴッドマン」怪獣ファイル

2001年から2002年にかけて、CS（ファミリー劇場）にて再放送された特撮ヒーローもの「行け！ ゴッドマン」（1972年～1973年）の各話登場怪獣を、当時の私は、自分のブログにて、毎週、紹介しておりました。その文面を、こちらにて、再公開いたします。「行け！ ゴッドマン」の登場全怪獣自体は、「東宝特撮全怪獣図鑑」（小学館）を見れば、いくらでも確認できるのですが、私の紹介文の方は、「全怪獣怪人大百科（60年度版）」（ケイブンシャ）で調べた各怪獣の身長・体重も記入されている点がとても優れています。ブログ時には添付していた怪獣の画像が、今回は転載できなかったのが残念なのですが、怪獣の画像につきましては、まあ、「東宝特撮全怪獣図鑑」の方を参考にさせていただくと言う事で。

また、今回、再収録にあたって、特別企画として、「行け！ ゴッドマン」とも関係の深い「行け！ グリーンマン」（1973年～1974年）、「行け！ 牛若小太郎」（1974年～1975年）、「突撃！ ヒューマン！！」（1972年）に登場した怪獣につきましても、「全怪獣怪人大百科」に記されていた身長・体重を、可能な限り、こちらにて再録させていただきました。せっかくなので、初期の「全怪獣怪人大百科」に載っていた出身地・別名も収録いたしました。

### ゴッドマン

身長・2～45メートル 体重・70キロ～500トン 出身地・ファイアーゴッド星  
（「全怪獣怪人大百科（60年度版）」掲載のデータより）

#### 第1話 キンガー

身長・30メートル 体重・1.9万トン  
姿を消す特殊能力を持ちます。

#### 第2話 ガバラ

身長・53メートル 体重・2.3万トン  
原子爆発でガマガエルが変身。口から青いガスを吐きます。

#### 第3話 ゴーストン

身長・25メートル 体重・2.5万トン 出身地・富士山火口  
ゴッドクラッシュを奪って、振り回します。

#### 第4話 ヤスゴン、ツノケラー

ヤスゴン（身長・体重・人間大）は、ピンチになると、悪臭のおならを出します。子どもと仲良しに。

ツノケラー（身長・体重・人間大）は、姿を消したり、口から粘着糸を吐きます。ヤスゴンを負かします。

#### 第5話 ツノシルバー

身長・2.3メートル 体重・300キロ（実際は、巨大怪獣）  
口から破壊光線を出します。

#### 第6話 ゴロザウルス

身長・20メートル 体重・1.2千トン  
のしかかり攻撃を得意とします。

#### 第7話 マダラン

身長・40メートル 体重・2.8万トン  
第1話に出てきた怪獣キンダーの着ぐるみを改造した怪獣かと思われます。  
両手を振り回して、暴れます。

#### 第8話 ギャットラー（植物怪人）

身長・30メートル 体重・8千トン 出身地・南太平洋  
岩石を投げたり、こん棒を振り回して、暴れます。  
「全怪獣怪人大百科」では「ギャッド」の名で紹介されています。

#### 第9話 モモングラ

身長・2.4メートル 体重・400キロ（実際は、巨大怪獣）  
閉じた傘のような武器で攻撃します。  
「全怪獣怪人大百科」では、なぜか「バトルス」と呼ばれています。

#### 第10話

海岸に、カメーバ（身長・20メートル 体重・2.8万トン）出現。  
動作は鈍くても、固い甲羅を持つカメーバは、ゴッドマンに敗れて、海へと逃走する。  
入れ違いに、町には、怪力のフォルゴン（身長・41メートル 体重・2.9万トン）が現れた。

#### 第11話 ボルペス

身長・体重・不明（巨大怪獣）  
手の先から、発火性の赤いガスを出します。

#### 第12話 イモゴラス

身長・体重・人間大～巨大化  
巨大後、手先から光線を出したり、見えないバリアを張ったりできます。  
死ぬと、じゃがいもに変わってしまいます。

#### 第13話 ブルマン

身長・体重・不明（巨大怪獣）  
素早い動きで、ゴッドマンの攻撃をよけ、岩を投げつけてきます。

#### 第14話 ドンゴラー

身長・35メートル 体重・1.3万トン 出身地・メキシコ原野  
接近戦が得意で、ゴッドマンを張り飛ばします。

#### 第15話 スケルトマン No.1・スケルトマン No.2

身長・体重・人間大（両方共）  
敏捷に動き、格闘戦が得意。瞬間移動もできます。髪飾りのようなナイフを投げます。  
No.1を助けに、No.2が出現しましたが、途中、コンビネーションが崩れ、仲間割れもしました。  
死んだら、骸骨になってしまいます。

#### 第16話 サンダ

身長・30メートル 体重・1.5万トン  
着ぐるみの変形してしまったのか、映画と違って、すっかり悪役面です。  
パンチ攻撃を得意とします。

#### 第17話 ガイラ

身長・25メートル 体重・1万トン

サンダの弟怪獣です。

はじめは、人間大で登場しましたが、ゴッドマンにかなわぬと見るや、巨大化しました。頭突きやパンチなどで攻撃してきます。

#### 第18話 ホッター

身長・2メートル 体重・110キロ

闇の世界で暗躍する、気味の悪い怪人。

念動力で自在に操る事のできる、縄状のムチで、ゴッドクラッシュに対抗します。

身軽で、格闘術も得意です。

他に、オヤジ面で、鈍いのか、叩いてもびくともしないランカー（身長・40メートル 体重・3万トン 出身地・ズルーム星）も登場。

#### 第19話 グリーンマスク

身長・体重・人間大

子どもをさらう怪人。卑怯な性格で、降参したふりをして、相手が油断したところを襲い掛かったり、瞬間移動して、背後から飛び掛ったりします。タックルも得意。

他に、パンチが強力な犬怪獣フントラー（身長・体重・不明、巨大怪獣）も登場。崖っぷちでゴッドマンと死闘を繰り広げます。

#### 第20話 カップルゲ

身長・31メートル 体重・1.3万トン（実際は、等身大怪獣）

カブトムシが変身した怪人。すばしっこく、かんざしのようなナイフを投げたり、角材を振り回して、攻撃してきます。

他に、空を飛べるバットマン（身長・2メートル 体重・200キロ、のちに巨大化）も登場。翼を振ると、地面が爆発します。実は、「緯度〇大作戦」に出てきたコウモリ人間です。

#### 第21話 ティボラス星人

身長・0~50メートル 体重・不定（最初は、等身大） 出身地・ティボラス星

流れ星になって、地球へ飛来。怖がる子ども達を追い掛け回します。

ゴッドマン超音波を浴び、老人？ になって、敗北しました。

他に、お魚怪獣オストタム（身長・28メートル 体重・1.8万トン、最初は等身大）も登場。ユーモラスな跳ね方をし、張り手が得意です。

#### 第22話 ツノジラス

身長・38メートル 体重・2.1万トン

「ゴッドマン」主題歌映像にも出てくる有名怪獣です。ゴッドスパークを受け付けない、強靱な皮膚を持ちます。

他に、タコ頭の怪獣エレファンダー（身長・195センチメートル 体重・82キロ、のちに巨大化）も登場。顔から光線を出し、巨体で抱きかかってきます。

#### 第23話 トットザウルス

身長・18メートル 体重・7万トン

子どもにいじめられたニワトリが変身、巨大化した怪獣。くちばしによる突つき攻撃を行ない、くちばしでゴッドスパークをくわえて、放り返します。

他に、いじめられた猿が変身した怪獣シラージ（身長・192センチメートル 体重・106キロ、のちに巨大化 出身地・兵庫県）も登場。「ゴッドマン」主題歌映像にも出演しており、敏捷で、首締め攻撃が得意な怪獣です。

#### 第24話 ウルフラー

身長・197センチメートル 体重・124キロ（実際は、巨大怪獣）

町を歩いていた怪獣おじさんが遭遇。腕力があって、ゴッドマンを叩き飛ばします。

ゴッドマンとの戦闘中、寝ていた怪獣ゲジルバを起こしてしまい、三つ巴の戦いの末、ゲジルバに尻尾をもがれて、爆死してしまいました。

ゲジルバ（身長・体重・不明、巨大怪獣）は、敏捷な動きで、好戦的に飛び掛ってきますが、大きな鼻が弱点です。

#### 第25話

遊んでいた怪獣おじさんとお姉さんと子ども達を襲った怪獣トリローン（身長・35メートル 体重・1.3万トン）は、口から赤いガスを吐き、さば折攻撃を仕掛けてきます。（一部の書物で、ドンゴラーとトリローンの記述に混乱あり）

怪獣おじさんの夢の中に現れた怪人イボギラー（身長・体重・人間大）は、軽業と棒術が得意で、敵の武器を無効化したり、姿を消す事ができる強敵です。

#### 第26話（終） ステゴジラス、アクモン

身長・体重・人間大（両方共）

ゴッドマン最後の敵で、煙を噴く山の命令に従って、コンビで、少女を誘拐します。移動用の乗用車を自由に出没させ、隠れ家も持っています。

ステゴジラスは、パンチやキック攻撃が得意で、のちに機関銃を用います。アクモンは、投げナイフ、縛り縄、粘着糸、短ムチなど、多彩な武器を使い、拳銃や機関銃の扱いに

も長けています。

ゴワラックドン

身長・50メートル 体重・5.5万トン

ケイブンシャの「全怪獣怪人大百科」内で紹介されていますが、未登場。実は、「行け！ グリーンマン」に登場した怪獣ゴワラックドン。

スパイダー

身長・185センチメートル 体重・107キロ 出身地・アンモニアン星

ケイブンシャの「全怪獣怪人大百科（49年度版）」内で紹介されていますが、未登場。恐らく、「行け！ グリーンマン」に登場した怪獣スパイダーの誤表記。

## グリーンマン・牛若小太郎・ヒューマン 怪獣データ

### 「行け！ グリーンマン」登場怪獣データ

#### グリーンマン

身長・185センチメートル～45メートル 体重・90キロ～3万トン 出身地・金河系グリーン星

#### 魔王

身長・215センチメートル 体重・196キロ 出身地・暗黒星雲

#### トンチキ

身長・39メートル 体重・2.5万トン 出身地・上野公園地下

#### ギリंगा

身長・180センチメートル 体重・86キロ 出身地・岡山県

#### ガラメドン

身長・210センチメートル 体重・104キロ 出身地・埼玉県

#### スパイダー

身長・180センチメートル 体重・77キロ 出身地・広島県

#### インベルン

身長・203センチメートル 体重・198キロ 出身地・青森県

#### トットザウルス

身長・18メートル 体重・7万トン

#### ブルゲリラ

身長・112センチメートル 体重・96キロ 出身地・秋田県

#### ギャロン

身長・30メートル 体重・1.2万トン 出身地・アフリカ

ドロク星人

身長・0～15メートル 体重・0～5千トン 出身地・ドロク星

ダンバラキ

身長・35メートル 体重・1.7万トン 出身地・水俣湾

ゲジル

身長・28メートル 体重・2万トン 出身地・ノングリーンランド

ブランカー

身長・186センチメートル 体重・81キロ 出身地・四次元世界

ダンケット

身長・195センチメートル 体重・102キロ 出身地・東京都

ガイラ

身長・199センチメートル～25メートル 体重・115キロ～1万トン 出身地・千葉県

ガバラ

身長・189センチメートル～53メートル 体重・97キロ～2.3万トン 出身地・熊本

ストック （砂怪獣）

身長・188センチメートル～38メートル 体重・101キロ～2万トン 出身地・ゴビ砂漠

カッパルゲ

身長・31メートル 体重・1.3万トン

ホッター

身長・2メートル 体重・110キロ

「行け！ 牛若小太郎」登場妖怪データ

牛若小太郎

身長・162センチメートル 体重・59キロ

ウラギラ （半妖怪）

身長・166センチメートル 体重・86キロ

入道

身長・186センチメートル 体重・98キロ

コーンジョ

身長・155センチメートル 体重・77キロ 出身地・闇一族

青坊主

身長・180センチメートル 体重・93キロ

唐傘小僧

身長・190センチメートル 体重・86キロ

紙舞妖怪

身長・180センチメートル 体重・97キロ

白首

身長・196センチメートル 体重・118キロ

三つ目妖怪

身長・169センチメートル 体重・73キロ

毒蛾妖怪

身長・170センチメートル 体重・80キロ

吸血鎌づかい

身長・175センチメートル 体重・81キロ

木の精フンババ

身長・165センチメートル 体重・70キロ

悪妖怪火車

身長・180センチメートル 体重・130キロ

お尻つねつね妖怪

身長・160センチメートル 体重・71キロ

くらやみ妖怪

身長・150センチメートル 体重・60キロ

うかれ女

身長・148センチメートル 体重・44キロ

疫病神

身長・170センチメートル 体重・70キロ

鐘の精

身長・168センチメートル 体重・73キロ

「突撃！ ヒューマン！！」登場怪獣データ

ヒューマン

身長・210センチメートル 体重・75キロ

キングフラッシャー

身長・205センチメートル 体重・73キロ 出身地・フラッシャー星

カブトンガ （兜怪獣）

身長・180センチメートル 体重・3トン 出身地・青森県恐山

ザリゾン

身長・250センチメートル 体重・2.7トン

レッドロック

身長・205センチメートル 体重・3トン

ジャイロック

身長・230センチメートル 体重・3トン 出身地・アフリカ奥地

ドラゴンダ （深海怪獣）

身長・180センチメートル 体重・2.6トン 出身地・東シナ海

シビレゴン

身長・190センチメートル 体重・2トン

フラッシャー

身長・180センチメートル 体重・90キロ

「うたう！ 大龍宮城」OP ファイル

## 「うたう！ 大龍宮城」OP ファイル

東映の不思議コメディもの「うたう！ 大龍宮城」（1992年）は、毎話、冒頭（オープニング）で、その回に登場する海棲生物の詳細がナレーションによって紹介されておりました。このナレーションの内容は、本放送時から私は気になっていたのですが、CS（ファミリー劇場）で本作が再放送された際（2004年～2005年）、その各文を書き出して、自分のブログにて毎週紹介させていただきました。以下に載せたのは、その全文です。

このOP ナレーション自体は、「愛ある限り戦いましょう！ ～不思議美少女コレクション～」（主婦と生活社・2004年）でも確認できるのですが、私のブログでの紹介文では、そのナレーション内容が、実際の本編に出てきた生き物と、どう関連性があるかまで独自研究で考察させていただいております。

### 第1話「カメ」

「カメ目の爬虫類の総称。体は背、腹両面に甲羅があり、水中または陸上に棲む」  
（本作に出てくるカメは、龍宮城おかかえのタクシー運転手で、普段は地上社会をスパイ？ している）

### 第2話「タコ」

「頭足類タコ目の軟体動物の総称。体は頭、胴、腕の三部からなり、腕は八本ある。敵に襲われた時、水中にスミを吐いて逃げる」  
（本作に出てきたタコは、再会した乙姫に言いがかりをつけて、いきなりコーヒー？ をひっかけた）

### 第3話「イカ」

「頭足類ツツイカ目とコウイカ目の軟体動物の総称。体は円筒形または袋状で、五対の腕があり、胴の左右にはヒレがある」  
（本作に出てくるイカは、龍宮城の祈祷師で、魔法使い風の三角帽子をかぶった正装がイカっぽく見える）

### 第4話「サバ」

「サバ科サバ属の硬骨魚の総称。鯖型と言う美しい体型を持ち、青緑色で、特異の流紋がある」

（本作に出てくるサバは、乙姫の叔父で、男前の冒険家）

#### 第5話「アジ」

「アジ科。温暖な海に群れをなして住む。タタキやヒモノが味がいい」

（本作に出てくるアジは、生活苦でヒモノになりかけていた。その後、ムチで叩く「アジのタタキの女王さま」に大変身！）

#### 第6話「ウニ」

「栗のいが状の殻を持ち、海底に住む。すし屋で食べると高い」

（本作に出てくるウニは、職業が歌手で、龍宮城崩壊後の海の仲間の中では一番出世した。ウニのスタイルは、パンチパーマで、黒いドレスを身に付けている。どうやら、美川憲一がモデル？）

#### 第7話「フグ」

「フグ・真フグ科。内臓に毒があるが、刺身や鍋物がすこぶる美味しい」

（本作に出てくるフグを演じるのは、東映不思議コメディのベテラン常連・柴田理恵。激怒すると、体が膨れる体質をしている。息子のフグ太は、将来、毒のあるフグになって、人間に復讐しようと企んでいる）

#### 第8話「タイ」

「タイ・タイ科。尾頭付は祝い事に使われる。たいへん美味しい」

（本作に出てくるタイは、乙姫の実の姉で、つまり元・王女さまだった。龍宮城にいた頃は、赤い衣装を着て踊っていて、現在はサーファーと駆け落ち中）

#### 第9話「サメ」

「皮膚がザラザラしている。ヒレは中華料理のスープなどに使われる」

（本作に出てくるサメは、柔軟でカルシウムいっぱいの脊髄が自慢の、龍宮の舞いの踊り子。深海魚の親方のもとから逃げ出して、ブロードウェイのダンサーになろうと画策した）

#### 第10話「ブリ」

「アジ科。外洋に住み、群れをなして泳ぐ。ハマチ、ワラサとじょじょに大きくなり、ブ

リとなる出世魚である」

（本作に出てくるブリは、看護婦で、龍宮城にいた頃はまだハマチだった。地上に出てから、声の美しいブリにと急成長した）

#### 第11話「カキ」

「イタボガキ科の二枚貝。海中の岩についている。私はカキフライが好きです」

（本作に出てくるカキは、飲み屋の母を持つ幼い少女（＝ガキ？）。乙姫が魚の唄を歌っても「カキだからピンとこない」と言い返した反抗期盛りで、その為、乙姫はカキバージョンの歌詞をわざわざ書き直した。今回は、他にも、珊瑚女王の友人で、ワタリガニも出演）

#### 第12話「エイ」

「軟骨魚類。背、腹が平たく、尾びれはムチ状に細長く、その身はかまぼこの原料や肥料になる」

（本作に出てくるエイは探偵で、黒いガウンをマントのようにひらひらさせながら、走り回る。お約束だが、人を叩く時は、「えいっ」と言う）

#### 第13話「シャコ」

「シャコ科の節足動物。寿司だね。でも、私は好きだ」

（本作に出てくるシャコは龍宮城おかかえの大工の棟梁で、いつもトンカチを手に入っている。メインストーリーとの絡みはほとんど無かった）

#### 第14話「マグロ」

「サバ科の遠洋性回遊魚。その脂身はトロと言い、とても美味しい」

（本作に出てくるマグロは龍宮城きっての医学博士で、地上では、魚貝専門のマグロ医院を開業していた。実は、リンゴやバナナに異常な愛情をしめし、「トロトロトロ」と口走る変質者）

#### 第15話「クラゲ」

「かんてん質のかさ状の体をプカプカさせて、海の中を泳ぐ。塩漬け、酢の物、サラダとして食べられる」

（本作に出てくるクラゲは、溺れてプカプカ浮かんでいたところを、赤星昇一郎演じる悪党に助けられた。電気を起こす能力を持ち、その後、人間への憎悪から、怪人感電男に化ける）

#### 第16話「サヨリ」

「サヨリ科。近海に住み、春のお刺身は美味しい。吉永小百合とは親戚ではありません」（本作に出てくるサヨリは、元乙姫の追っかけだった、カメさん憧れの美人魚。現在は、過激派の熱帯魚の手先となり、龍宮城崩壊の謎を探ろうと暗躍する。演じたのは、当時、「鳥人戦隊ジェットマン」のヒロイン役を好演したばかりで人気の高かった内田さゆりで、もちろん、吉永小百合とは、名前が同じ以外、何の関係もありません）

#### 第17話「カツオ」

「サバ科。世界中の暖かい海を泳ぐ。鰹節の原料となる」（本作に出てくるカツオは、乙姫と同年代の親しい友達で、16話にもチラリと名前が出てくる。かつては太平洋を豪遊していたらしく、体には太平洋の匂いがしみついている。カツオのように豪快に泳いでいたところ、シンクロナイトスイミングのコーチにスカウトされるが、そのコーチの本職が鮎屋の主人だったので、騒動に。危うくカツオの寿司を食べさせられかける）

#### 第18話「サンマ」

「サンマ科。焼いて、大根おろしをつけて食べると美味しい。秋のさんまは脂がのって一段と美味しい」（本作に出てくるサンマは、乙姫の父方の祖父。痩せて、背の高い老人で、魚屋でも鯉のぼりにでもお経をあげたがるお坊さん。最近、「爆竜戦隊アバレンジャー」へのレギュラー参加ですっかり知名度のあがった奥村公延が演じている）

#### 第19話「アサリ」

「マルスダレ科の小さな二枚貝。浅い海の砂の中に住む。味噌汁のみとなる」（本作に出てくるアサリは、龍宮城を崩壊させた一流商社に仕返ししようとしたところ、ガードマンに逆に捕まってしまう、龍宮城の秘密を何もかも喋ってしまった小心者の根性なし。あげくは、怪人ザ・農業にアサリの味噌汁ないしアサリの酒蒸しにされかける。今回は、他にも、婚期を逃した魚介類の一人として、オニオコゼの名前も登場）

#### 第20話「ヒラメ」

「ヒラメ科。体は平たく、海底の砂地に住む。お刺身にすると、とてもおいしい」（本作に出てくるヒラメは、勉強が禁止されている龍宮城でコソコソ隠れて勉強していた非行少女だった。地上に出たからは、小学校の先生になって、存分に勉強を学べる新生活を満喫していたが、魚の幽霊ザ・カルシウムの呪いを受けてしまう）

#### 第 21 話「アワビ」

「ミミガイ科の軟体動物。肉や肝は食料となり、貝はボタンの材料となる」

（本作に出てくるアワビは、頭が固いヘディング名人のプロサッカー選手。龍宮城崩壊が原因で、恋人のトコブシと離れ離れになり、失恋してしまった過去を持つ。ちなみに、アワビには「あわびの片思い」という喩えがある）

#### 第 22 話「イワシ」

「イワシ科。海面近くを群れを作って泳ぐ。丸干し、目刺しが安い」

（本作に出てくるイワシは、龍宮城を崩壊させた一流商事会社のそばで屋台のラーメン屋をひらいていた。この役の抜擢は、ラーメンのスープのダシにイワシが使われるから？）

#### 第 23 話「ナマコ」

「ナマコ類。骨が無く、海底の泥を食べ、中の有機物を吸収して生きている。酢の物にして食べる」

（本作に出てくるナマコは、性悪女房につかまって、暗い生活を送っていた。ブサイクなにせ乙姫に化けて、乙姫人形を売っている。サバやスルメイカとは知り合いらしい。なお、8話で、ウツボ相手にタイの噂話をしていたナマコも、キャストイングは違うが、同一人物かと思われる）

#### 第 24 話「ウツボ」

「ウツボ科。ウナギに似た、歯の鋭い魚。食べると意外に美味しい」

（本作に出てくるウツボは、サシミになりたいと思うほど悲惨な浮浪者生活を送っていた。UFO に操られて、ウツボ王子に変身して、太郎たちに噛み付くが、その後、UFO に自分の子ども（卵）を生んでもらい、生きる希望を見つける。なお、8話で、ナマコが話すタイの噂話を聞いていたウツボも、キャストイングは違うが、同一人物かと思われる。また、UFO 役の蛭雪次朗は、今でこそ特撮映画の名バイプレイヤーとして有名だが、当時は「美少女仮面ポワトリン」で恐怖のディアブルを演じたばかりだったので、UFO のコミカルキャラはあまりのギャップに非常に衝撃的だった）

#### 第 25 話「カサゴ」

「カサゴ科。浅い海に住む。紅色で、黄色のまだら模様。頭、目が大きく、煮魚にすると美味しい」

（本作に出てくるカサゴは、「しづこ」という名前を持つ女性で、ラーメンが好きだが、共食いになるのでナルトだけは食べない。その事がきっかけで、麺類の悩み相談役の「麺類の母」となり、危うく悪い麺類たちにだまされかけた。名うての個性派女優の室井滋が、カサゴならぬアネゴ的キャラクターを楽しく演じている）

第 26 話「ヒトデ」

「浅い海底に住む。平たく、星型または五角形で、トゲがある」

（本作に出てくるヒトデは、雌雄同体なのか、クジラ大王に恋焦がれるホモ青年。刀を持った巡礼者で、通せんぼする時、大の字の形をとる）

第 27 話「マンボウ」

「マンボウ科。世界中の暖かい海に住む。海面近くをゆうゆうと泳ぐ。肉は白く、柔らかい」

（本作に出てくるマンボウは、乙姫の乳母で、白い帽子と白っぽい服を身につけた、優雅な雰囲気の高貴な貴婦人。スターを夢見ており、乙姫にも同じ夢を与えようと策略を張る）

第 28 話「イセエビ」

「おめでたい高級なエビとして、お正月のお飾りや結婚式などのお祝い事に使われる。美味しい」

（本作に出てくるイセエビは、パーマをしたパラーのウェイトレスで、乙姫に告げ口したかと思えば、自分の身が危うくなれば、簡単に裏切ったりもする調子のいい奴。実は、母親で、守るべき小さな子どもがいた）

第 29 話「ヤドカリ」

「巻貝の貝殻に住む。成長するにしたがって殻を取り替える」

（本作に出てくるヤドカリは、土木作業員なのか、ヘルメットに作業服、スコップを持った男で、そのいでたちで、龍宮城を崩壊させた商事会社に突撃を敢行した。今回は総編集につき、それ以上の出番はない）

第 30 話「アイナメ」

「体長 30 センチくらいの、緑がかった色の魚。浅い海に住む」

（本作に出てくるアイナメは、メスったらしの軽薄そうな美青年で、沢山のメスの魚や貝を泣かせてきた。自分が泣く時は「アイ、ナメ～」とうめく。18 話にも、息子がいるらしいアイナメの名前が出てくるが、今回のアイナメとは別人らしい）

第 31 話「トビウオ」

「トビウオ科。胸びれが長く、大きく空中を飛ぶ」

（本作に出てくるトビウオは、渡世人をしている男で、龍宮城時代から、周りから浮いていた。再登場した蛍雪次朗演じる UFO と結婚して、身を固める）

第 32 話 「カワハギ」

「皮が厚いので、皮をはいで料理する。肝臓が美味しい」

（本作に出てくるカワハギは、カワハギの名前で売ると生臭く思われるので、白雪姫に化けて、アイスクリームを売っていた若い女性。ニセ白雪姫である事を証明する為、カワ=衣装を脱いでみせたが、正体が分かると、今度は煮付けにされそうになる）

第 33 話 「ハマグリ」

「マルスダレガイ科の二枚貝。浅い海の砂や泥に住む」

（本作に出てくるハマグリは、海岸の砂浜に潜っていたのを見つけられて、ハマグリ焼きにされかけた。人の首を締める時、「グリグリ」と言う）

第 34 話 「ヒラマサ」

「アジ科。ブリに似ている。ブリより平ら。ブリより暖かい海が好き。ブリより高級である」

（本作に出てくるヒラマサは、優秀な音楽家で、ダミ声だったブリとは大違い。ものすごくプライドが高く、バカにされると激怒する）

第 35 話 「アカガイ」

「フネガイ科の二枚貝。浅い海に住む。肉は赤身で、たいへん美味しい」

（本作に出てくるアカガイは易者で、今回、三度めの登場の UFO のインチキ不動産のセールスを見破ってみせた。しかし、自身も、女子中校生たちに「私は真珠をつくれる」と嘘をついてしまった為、龍宮城の宝の真珠ネックレスを盗もうとした。アカガイなのは「真っ赤なウソ」とかけていたのかも）

第 36 話 「イシモチ」

「イシモチ科。太平洋に住む。カマボコ材料となる」

（本作に出てくるイシモチは「龍宮亭イシモチ」と言う芸名を持つ落語家で、無責任な性格をしている。今回は、龍宮城を崩壊させた一流商事会社の社長役で、佐原健二もゲスト出演）

第 37 話 「タチウオ」

「タチウオ科。暖かい海に住む。体は銀色で、刀のように細長い。塩焼きにして、酢だちをかけて食べると美味しい」

（本作に出てくるタチウオはスラッと背の高い好青年。龍宮城にいた頃はフリーターだったが、龍宮城崩壊後、立身出世して、青年実業家となり、超高層龍宮マンションを建て

る夢を抱く。しかし、彼の事業の正体は、芸能スキャンダル仮面に化けた犯罪行為だった。なお、タチウオを演じているのは、渡辺いっけい)

#### 第 38 話 「フジツボ」

「甲殻類。カニやエビの仲間である。殻の口から足を出し、プランクトンを食べる。貝ではない」

( 本作に出てくるフジツボは、かつて、乙姫選出選挙で乙姫と争った経歴を持つ。選挙敗北後、ジェラシーから崩壊の舞を踊り続け、自分が龍宮城を崩壊させたと信じていた。顔も髪も赤く染め、歌舞伎スタイルで舞う。フジツボを演じているのは、「妖怪ハンター ヒルコ」に出ていた上野めぐみ )

#### 第 39 話 「ホタテガイ」

「イタヤガイ科の二枚貝。貝柱が太くて、美味しい」

( 本作に出てくるホタテガイは、「市川ホタテガイ之丞」と言う芸名を持つ、龍宮城歌舞伎の名女形。泣き上戸で、大洪水が起こるほど泣いてしまう。魚に襲われた事に心を痛めて、貝だけの龍宮城を作ろうとした )

#### 第 40 話 「コバンザメ」

「世界中の暖かい海に住む。普段は、サメ、カジキ、マンボウ、クジラ、海亀や船の底に吸い付いて、暮らしている」

( 本作に出てくるコバンザメは、劇中歌の内容どおり、歌って踊れる野菜を作っている女性。ただし、ニセ農協の罠で、自分が作った野菜たちに裏切られた為、激怒して、額に小判、長い爪を生やした怪人に変身した。演じるは、日向明子 )

#### 第 41 話 「ウミタナゴ」

「ウミタナゴ科。親は、卵を産まないで、いきなり子供の魚を産む。釣り人に人気がある」

( 本作に出てくるウミタナゴは、「闇の魚介類」の異名を持つ、龍宮城の忍者。クジラ大王とサンゴ女王につかえ、ひそかに物を盗んだり、おばあさんに化けたりして、暗躍する )

#### 第 42 話 「ホタルイカ」

「ホタルイカ科。青白い光を発する、小さなイカ」

( 本作に出てくるホタルイカは、金ぴかの宇宙人コスプレ姿でインチキ宇宙グッズを売り歩いている少女。最後は、行方不明中の宇宙飛行士の父を探す為、青白い火を噴く小型ロケットに抱きついて、宇宙へ去っていった )

第 43 話 「ムツゴロウ」

「ハゼ科。干潟の泥の上をむなびれを使って、はい回る。時々、ジャンプして、メスの気を惹く。蒲焼きが美味しい」

（本作に出てくるムツゴロウは青年科学者で、龍宮城崩壊時、浜辺に倒れていたのを、宿題に悩む子供達に助けられた事から、宿題をしたがる洗剤を発明して、宿題洗濯童子となって、子供たちを助けようとした）

第 44 話 「タラバガニ」

「カニに似ているが、ヤドカリの仲間である。冷たい海の底に住む」

（本作に出てくるタラバガニは中年の床屋さん。ハサミで声を切り取ってしまう能力を持つ。今回は、FM 龍宮城に抗議する魚介類として、ハゼ、ヤリイカ、ボラも登場）

第 45 話 「シーラカンス」

「4 億年近くも前から地球に住んでいた、古い魚。数千万年前に全滅したと思われていたが、1938 年に発見され、世界中を驚かせた」

（本作に出てくるシーラカンスは、山奥で仙人のような隠者生活を送っている豪傑。煎じて飲むと、偏差値が高くなるホームランボールを打つ事ができる）

第 46 話 「スズメダイ」

「スズメダイ科。南の珊瑚礁に住む、小さな魚」

（本作に出てくるスズメダイは、ベートーベンみたいな容姿をした音楽家。いつも水色の服を着ており、楽器の気持ちが分かるという特技を持つ。ベースから愛され、乙姫と恋仲になる）

第 47 話 「スケトウダラ」

「北の海に住む。すり身にして、かまぼこの原料となる。卵はタラコとなる」

（本作に出てくるスケトウダラは、レストランを経営するコックさん。得意な料理はオムライス。冬も輝きたい白鳥座に操られて、宝石強盗のザ・辛子明太子に変身した）

第 48 話 「プランクトン」

「水面、または水中で浮遊する微生物。動物性プランクトンと植物性プランクトンがある。魚や貝のエサとなる」

（本作に出てくるプランクトンは、ナマズの座長が率いる旅芸人「川魚一座」に入団した娘。団員のコイとフナに食われかけるが、それを逆用して、自分が座長におさまってしまう。「川魚一座」は「泥臭さ」をウリにしている）

#### 第 49 話 「イソギンチャク」

「円筒状の体を持ち、浅い海の岩などに着生する腔腸動物。口の周りの触手を開き、水中でエサの来るのを待つ」

（本作に出てくるイソギンチャクは、ガソリンスタンドに勤める、体育系風の青年。名前とイソの香りがするところから、「全日本龍宮城の魚や貝を美味しく食べるグルメ同好会」のリーダーに龍宮城の一員だとぼれ、龍宮城を崩壊させた一流商社に討ち入りするようにけしかけられた。「グルメ同好会」の本当の狙いは討ち入りに集まった魚や貝を食べてしまう事で、イソギンチャクは利用されただけであり、会食対象からは外されてしまった。なお、「グルメ同好会」に気をつけるよう、乙姫はマグロやアカガイ、ウニやサバへと電話をかけているが、過去に登場した魚介類たちと同一かどうかは不明）

#### 第 50 話 「タツノオトシゴ」

「龍に似た、体長 5 センチから 15 センチの魚。直立して泳ぐ。浅い海に住み、安産の守りとされる」

（本作に出てくるタツノオトシゴは、パン屋「ローレイ」に勤める、色黒で細い中年男。ボロ切れをまとったような姿の怪人フケイキに変身し、口から吐く粉で、人間をケーキに変えてしまう。クジラ大王たちの手先として、龍宮城を崩壊させた一流商社を乗っ取り、新しい龍宮城を誕生させる計画の執行者となった。今回は、次回最終回への伏線として、リュウグウノツカイも謎の天女として出演）

#### 第 51 話 「リュウグウノツカイ」（最終回）

「アカマンボウ目リュウグウノツカイ科。大きいものは 6 メートルを越し、赤く長いヒレが羽衣のように美しい。本当にいるんですよ」

（本作に出てくるリュウグウノツカイは、龍宮の使者である若い天女。乙姫に龍宮城復活の為に手引きをする。他にも、新しい乙姫になろうとして、カマス、ボラ、イタヤガイ他多数の魚介類も登場）



眉村ジュブナイル 美少女軍団の全て

## 解説

この「眉村ジュブナイル 美少女軍団の全て」という小文は、もともと、私の古いホームページ（「私の愛した極悪キャラクターたち」）で公開していたミニコラムだったのですが、そのホームページが閉鎖した後、今度は、作家の眉村卓さんがお亡くなりになりました（2019年）、そこで、急きょ、私のブログの方に再掲載した代物なのでした。

これらの原文バージョンでは、文面の加工ができましたので、引用文のあちこちを段落下げしたり、色付けしたりして、読みやすくしていたのですが、今回のこのページでは、そのような加工のサービスがありません。そのため、やや読みづらくはなってしまいましたのですが、それでも、本文だけでも再読して、楽しんでいただければ幸いです。

## 眉村ジュブナイル 美少女軍団の全て

信じない人も多いかもしれないが、私が書いたキワモノ長編小説「影の少女」は、多分に眉村卓のSFジュブナイルの影響を受けた作品である。たとえば、影子の悪口が黒板に書かれているシーンは「ねらわれた学園」冒頭部分の焼き直しだし、影子が授業中に教師の鼻をあかすのは「地獄の才能」のアレンジである。終章で、正一少年が影子と二人きりの生活を夢想するのは「まぼろしのペンフレンド」だし、「影の少女」のテーマである「人間とペットの間の恋」という発想からして「地球への遠い道」をヒントにしたものだったのだ。しかし、それ以上に、眉村ジュブナイルから影響を受けていたのが、「超人的ヒロインが美少女だ」という部分だったのである。

あまり語られてないようだが、眉村ジュブナイルには、やたらと美少女が登場する。眉村卓のSF小説の美少女といえば「ねらわれた学園」の高見沢みちるが真っ先にあげられそうな感じもするが、実際には、「ねらわれた学園」は映像化されて知名度が高いというだけの話に過ぎず、他の眉村小説には、高見沢みちるをも圧倒するような美少女や美人がわんさかと出てくるのである。

その中でも、トップの美少女といえば、まずは「まぼろしのペンフレンド」の本郷令子あたりであろうか。彼女は、異次元の無機生命体が作ったアンドロイドなので、ひたすら美人であったとしても、最初からそのように作られた訳なのだから、当然と言えば当然の話である。その美しさは、主人公の少年の心にトラウマを残してしまうほどなのだ。

「年は明彦よりひとつかふたつ上だろうか、目のさめるような美しい顔だちだった。」  
（「まぼろしのペンフレンド」）

「花のような微笑をうかべたまま、ゆっくりと首を横にふった。」（同）

「こんなに美しい顔をした少女の口から、そんなつめたいことばが出てくるとは、まったく信じられなかった。」（同）

「エレベーターのような小さな室の青い光に照らされたその令子の顔を、明彦はこの世にまたとない美しいものに思った。」（同）

同じように、その美貌で、主人公の少年をとりこにしまった美少女としては、「闇からきた少女」の大森由美子がいる。彼女の場合は、単に70年先の時代から来ただけの未来人なのだが、それでも、これほどの美少女なのだ。

「知らない少女だった。が、その長い黒い髪をたらしめた顔は、まるで彫刻のようにととのっていたのである。どこをさぐっても欠点のなさそうな、すばらしい美少女なのであった。」（「闇からきた少女」）

「少女はそっと微笑してみせた。笑うと、そのまま花のような感じだった。」（同）  
 「それがまた髪のがーい、ぞっとするようなきれいな女の子でね」（同）  
 「由美子は強い風に髪をなびかせながらうたうような調子でいった。日光を受けたそのひとみや鼻すじやくちびるは、おどろくほど優雅で、きゃしゃに見える。」（同）  
 「由美子は靖子のお古を借りて着ているので、ふつうの少女とかわらないかっこうになっていた。が、それだけに、いよいよ美しさが目だつ結果になっていた。」（同）

基本的に、眉村ジュブナイルに登場する未来人の女性は美少女・美人と表現されている場合が多い。タイムマシンで未来から来た少女であっても、未来を舞台にした物語においてもである。たとえば、「泣いたら死がくる」に出てくる近未来の悪の組織・暗黒連合の女幹部キャラもあっさり美人と書かれている。

「横に立っていた美しい車掌が、ほおえみながら呼びかけた。」（「泣いたら死がくる」）  
 「キャラは、美しいが、ひややかなほほえみを走らせた。」（同）

「侵された都市」に出てきた、侵略宇宙人と戦う未来の地下運動の女リーダー、イワセ・マユミにしても同様である。

「声をかけたのは、腕を組んでいたひとりである、中央の女だった。色が白くて澄んだひとみ、くっきりと通った鼻筋、すばらしくきれいな人だった。」（「侵された都市」）  
 「イワセ・マユミが微笑した。はじめて見る微笑だったが、おどろくほど美しかった。」（同）

「さすらいの終幕」の橘英子も、20世紀育ちの未来人なのだが、はっきりと美少女とは書かれていない。しかし、彼女の母親に関しては「若く美しい妻」と表現されているので、その血をひく英子も、きっと、それなりの美少女だったはずであろう。

「英子はかすかに微笑していたのだ。まるで仲間を見つけたといわんばかりのほほえみなのだが、それは思いもかけずかわいらしい。まるで花のような感じだったのである。」（「さすらいの終幕」）  
 「真紅のかさを高くかざし、レインシューズに水をけたてながら上気した顔でこちらへ走ってくる。たしかに雨の中に、ぱっと花が開いたようなながめといえないこともない。」（同）

とにかく、未来人イコール美少女なのである。「時間戦士」に出てくるエキストラの未来少女たちさえ、こんな風に描写されている。

「少女らは、ひどく優美だった。それはかれがなんどか複製で見たことのある、昔の名画の女神たちを思いださせた。もっとも、そうはいつでも、少女らが画の女神たちにそっくりだったというわけではない。彼女らは、もっとしなやかで、ほっそりしていた。」（「時

間戦士」)

とうとう、主人公の少年より一世代だけ先の未来少女までもがカワイコちゃんとなってしまう。「少女」に出てきた、主人公の少年と深い関わりを持つ未来少女については、こんな感じだ。

「へんな女の子がいたのだ。年は、伸一郎と同じくらいだろう。とてもかわいい顔だちをしている。だが、着ているものがいけなかった。テルテル坊主のようなスカートともねまきともつかないかっこうで、おまけに、パッと燃えあがりそうな赤さなのである。」  
 (「少女」)

「還らざる城」に出てくるカラリンコも、40世紀と言う超未来から来たので、もちろん美少女である。

「やっぱりきゃしゃな-とてもかわいい顔だちだ。どう見ても、敏夫と同じぐらいの年の、それにしてもはからだつきはほっそりしすぎていたが-少女である。」(「還らざる城」)  
 「そういえば、カラリンコだって、線は細いが、なかなかきれいなのだ。」(同)

しかし、カラリンコの場合は少し損をしている。と言うのは、「還らざる城」には、もう一人、戦国時代の少女シノと言うのが登場し、彼女もそこそこの美少女だからだ。この美少女対決では、主人公の少年はシノの方に軍配をあげてしまうのである。カラリンコが文明社会的な美少女なのに対して、シノはこんな感じの野性的な美少女だ。

「少女は、お化粧をしているわけでもなければ、きれいな着物を着ているわけでもない。はっきりいえば、ひどくみすぼらしいといってもいいぐらいなのだが、その全身には生気が満ちあふれている感じだった。目が大きく、とてもあいらしい。」(「還らざる城」)

未来人のバリエーションと考えてもよいのだろうか。眉村ジュブナイルにおいては、異次元から来た女性もひたすら美人揃いだ。「テスト」に出てくるカヌンは、体色が我々地球人とは異なる亜人類なのではあるが、それでも美人である事には変わらない。

「青年よりもまだ若い。たぶん二十歳にはなっていないだろう。ぬけるような色白の、ひじょうな美人だ。」(「テスト」)  
 「緑色の髪美人」(同)

「それぞれの遭遇」に出てきた多次元都市ビュロウに住むワリター・レイスも、一連の眉村ジュブナイル特有の美少女表現で描写されているので、見た目はきれいな少女だったのであろう。

「整った、きゃしゃな顔立ちなのだ。少年は、高い声で何かいった。」(「それぞれの遭遇」)

)

「ワリター・レイスの顔立ちがきゃしゃで、声も高いのは、女とすれば納得できる。」(同)

)

「現われて去るもの」の小西佐夜子に至っては、ただの異次元の日本での反体制組織のメンバーの一人に過ぎないので、別に美少女じゃなくてもよさそうな気もするのだが、それでも、かなりハイクラスの美少女である。

「青ざめた髪はみだれているものの、上品で知的な顔だちをしたその少女が着ているのは、まぎれもなくあの服だったのである。」(「現われて去るもの」)

「おじが買ってきた既成服は、おどろくほど少女にあっていた。というより、少女自身がきれいなので服のほうが引きたって見えるのかもしれない。」(同)

「なぞの転校生」も異次元人が出てくる作品だが、物語の中心となる異次元人は山沢典夫という美少年である。しかし、山沢典夫が美少年だと言う事は、そのまま、彼の同族である異次元少女たちも皆、美少女だという事になるのだ。

「髪も、ひとみも黒かったが、ととのった顔だちといい、ひきしまった筋肉といい、まるでギリシア彫刻を思わせるような美少年だったのである。」(「なぞの転校生」)

「一、三年の列のいちばんうしろには、典夫にまさるともおとらない美少女がひかえている。」(同)

「ねじれた町」の花巻千恵子も、異次元の住人の一種だと考えてよいのかもしれない。彼女の描写の仕方が面白い。美少女じゃないと否定しているにも関わらず、何やら、すごく魅力的な少女らしいのだ。

「その少女というのが、おやっと思うほどチャーミングだったからだ。それも、いわゆる美少女というタイプではない。小麦色の膚をして、ひきしまった顔には黒い大きな目が輝いている。第一、プロポーションが、抜群だった。」(「ねじれた町」)

異次元人らしき存在ならば、たとえショートショート小説に出てくる女性キャラであっても、眉村ジュブナイルでは美人として扱われる。ショートショート連作集「ふつうの家族」内の一編「みぞれ」に出てくる女性も、正体は異世界からの使者らしいのだが、こんな風に表現されている。

「彼の母よりはだいぶ若い、きれいな女の人が、傘の柄を持って、ついて来ている。」(「みぞれ」)

「見知らぬきれいな人は、前を見たままで、やさしくいった。」(同)

同じく、ショートショート小説「花を見ない？」(作品集「一分間だけ」に収録)に

出てくる女性も、幽霊みたいな存在なのだが、どうも美人であるらしい。

「門のところに、とても目のきれいな女の人が立って、サツキをみているのであった。何となく、引き込まれそうな感じの人なのだ。」（「花を見ない？」）

超能力を身に付けたエスパーやミュータントたちも、未来人や異次元人たちの同類と見なしてよいのであろう。彼らは、そもそも人類とは別の種族なのだから、眉村ジュブナイルの世界においては、美形・美人で当たり前のような扱われ方をする。

ミュータントが現人類を滅ぼして、新秩序を打ち立てた未来世界を描いた「地球への遠い道」には、セネアという美少女ミュータントが登場した。しかし、彼女の住むミュータント社会では、彼女クラスの美少女がぞろぞろいるみたいな雰囲気である。

「たしかに少女なのだ。十四、五歳くらいの・・・どきりとするような美しい顔だち、ととのったプロポーションの、少女だったのである。」（「地球への遠い道」）

「セネアは美しい眉をひそめた。」（同）

「かわいい少女の姿をしているくせに・・・船長や首席パイロットでも足もとにおよばないような知識を持っているなんて」（同）

「わかっているわよ。あんなにきれいな人なんだもの」（同）

「だれもかれもがスタイルがよく、顔だちもととのってはいるようだが・・・」（同）

「闇からのゆうわく」の松葉先生も、何やら、ものすごい美人だ。それもそのはず、彼女はセネアのご先祖さまとも言えるべき現代人のミュータントだからである。

「はっとするくらい、きれいな人だったのである。それも、ただの美しさではない。どこか、とぎすました刃物を思わせるような、さえざえとした美しさなのだ。」（「闇からのゆうわく」）

「長い黒い髪。雑誌の表紙にでもなりそうな顔だち。すらりと伸びた足。」（同）

「きれいであればあるほど、まるで鬼女でも見ているような威圧感を受けるのだった。」（同）

ちなみに、「闇からのゆうわく」には、「ミス石塚中学」と呼ばれる、普通人の美少女、白川ミミも登場して、松葉先生相手に、こんなシーンを展開したりもする。

「フランス人をおかあさんに持つという白いほおをまっかにして、松葉先生を見返した。どちらも抜群の美しさなのだから、壮観といたいところだが、」（「闇からのゆうわく」）

「天才はつくられる」で超能力を手に入れた女生徒、井戸崎玲子も美少女だったのであろうか。こんな風に描写されている。

「そのつめたくととのった顔だちの小がらな女生徒は、じっとこちらを見つめていたのである。」（「天才はつくられる」）

同じく、「ねらわれた学園」の高名なるエスパー、高見沢みちるも、すごい美少女だと言いたいところである。しかし、意外に聞こえるかもしれないが、原作小説内において、高見沢みちるは一言も美少女とは表現されていないのだ。彼女に関する描写は次のようなものである。

「ふたりの斜め前を、背の高い女生徒が過ぎてゆくところだった。どちらかといえば青白いまでの顔で、しかし、意志の強そうな切れ長の目は、まっすぐ前に向けられている。なぜか理由はわからないが、耕児は、その女生徒から、奇妙な圧迫を受けるように思った。」（「ねらわれた学園」）

しかし、眉村卓は、代わりに、高見沢みちるには次のような特徴を与えているのだ。

「高見沢みちるは微笑した。それが・・・耕児がはっとしたほど、魅力的な微笑だったのである。」（「ねらわれた学園」）

確かに、生粋のエスパーやミュータントならば、天然の美少女なのかもしれない。しかし、訓練や学習を通して、普通人から超能力者に成り上がった少女たちに関しては、眉村卓はストレートに美少女扱いしたがる傾向があるみたいである。

たとえば、「地獄の才能」には、宇宙人の英才教育で天才となった少年少女たちが次々に登場するが、明確に美男呼ばわりされているのは富士見和男だけだ。あとから、天才少女の列に加わる小田中明子については「目をくりくりさせて」程度の表現が見つかるのみだし、同じく天才少女入りした桜井多美子にしても「古風な制服だが、多美子にはそれがよく似あっていた。」ぐらいの描写しかなく、美少女なのかどうかは判断が難しい。

「天才はつくられる」のヒロイン、橋本敬子は、途中からテレパシー能力を身に付けてしまうが、彼女に対しての一番の褒め描写もこんな感じである。

「これから（テニス部の）練習が始まるのだろう。ほかの部員と並んで、同じように短いスカートをはき、手にラケットを持っている。史郎はまぶしいものでも見るように、そうした敬子の姿をながめた。」（「天才はつくられる」）

「つくられた明日」で、別の時間流のタイムパトロールメンバーに加わる杉森あかねにしても、登場人物の一人が「杉森あかねなんてカッコいい女の子」と言っているだけで、実際に彼女がどの程度の美少女だったのかは、まるで分からない。ストーリー中盤より、普通の少女から特殊な存在に昇格する女性キャラについては、ほとんどがこんな感じなのである。

とは言え、少しでも描写してもらえれば、まだいい方なのだ。実は、眉村ジュブナイルにおいては、普通人のヒロインに関しては、可愛い子なのかどうかも全く説明され

てない場合の方が一般的なのである。「とらえられたスクールバス」（のちに「時空の旅人」に改題）は、文庫三巻にも及ぶ長編にも関わらず、そのヒロイン、早坂哲子の容姿説明については皆無に等しい。映画やドラマでは、すっかり高見沢みちると双璧の美少女扱いにされている「ねらわれた学園」のヒロイン、楠本和美にしても同様である。ほとんどの作品の普通人ヒロインは、全く相手にもされていないのだ。

だから、最後に、一部の例外として、普通人の少女であるにも関わらず、かろうじて美少女として描写されている女の子たちの事を紹介しておく事にしよう。

まずは、「押しかけ教師」に出てきた中塚こずえだ。

「チャーミングで、しかも快活な彼女は、クラスの花形なのである。」（「押しかけ教師」）

次に、「闇からきた少女」の目黒和子の描写である。

「和子はにっこりした。その瞬間、白い歯がちらりとどのぞく。克雄が今まで知らなかったかわいらしい表情だった。」（「闇からきた少女」）

目が大きい事や色白な事も、美少女の表現の一つに加えてもよいのだろうか。それならば、「まぼろしのペンフレンド」の伊原久美子にも、「久美子の大きい目」「白い顔」などのささやかな描写がある。

「侵入を阻止せよ」の荒木千映子も、こうした「控えめな美少女描写」を与えられている普通人ヒロインの一人だ。彼女の描写の引用で本コラムは締めくくる事としたい。いつの日か、新たな眉村ジュブナイル美少女に出会える事を願いつつ。

「千映子は、演劇部長である。派手な顔立ちで目も大きい。陵北高校の男生徒の中には、彼女のファンもすくなくないようだ。」（「侵入を阻止せよ」）

## 「私の愛した極悪キャラクターたち」とは？

「私の愛した極悪キャラクターたち」と言うのは、私が昔開いていたホームページ（「衛星放送懐かし番組紹介」）の中で、メイン読み物にしていた連載コラムのことです。タイトル通り、私の好きな悪役キャラクターばかりを、映像作品のキャラだけに限定せずに、ざっくばらんに紹介しまくっていました。

基本は、そのキャラに対する私の個人的思い出を熱く書き綴っただけの小文なのですが、ついでなので、各キャラのページには、おまけとして、そのキャラと関連するミニコラム（研究文）も付属させておりました。いわば、これが、のちの「悪の組織の大研究」や「平成・令和生まれに捧げる特撮学」の原型となったエッセイです。

この「私の愛した極悪キャラクターたち」で、どんなキャラを紹介してきて、どんな付録コラムをつけてきたかを、ここに軽く紹介しておきたいと思います。

ちなみに、「私の愛した極悪キャラクターたち」と言うタイトルは、東映プロデューサー・平山亨氏のエッセイ「私の愛したキャラクターたち」をもじったものです。

- 1 長沢真琴 （女優代表）  
（おまけ「<特別エッセイ>あの頃、彼女は歌手だった」）
- 2 ジェネラルシャドウ （「仮面ライダー」代表）  
（おまけ「ジェネラルシャドウの真実」他）
- 3 テンペラー星人 （「ウルトラマン」代表）  
（おまけ「ウルトラ宇宙興亡史」「テンペラー星人激伝」他）
- 4 日輪仮面 （戦隊シリーズ代表）  
（おまけ「黒十字軍・我が闘争」）
- 5 バンデル星人  
（おまけ「バンデル星人メカニックのすべて」）
- 6 ブラックパンサー （「タイガーマスク」代表）  
（おまけ「『虎の穴』七つの謎」）
- 7 ダブルマン （宇宙刑事代表）

(おまけ「ダブルマン紳士録」)

- 8 ボルボック (「三つ目がとおる」代表)  
(おまけ「アニメ版『三つ目がとおる』と未収録作品について」)
- 9 ギロン星人  
(おまけ「『光速エスパー』怪事件ファイル」)
- 10 バックベアード (「ゲゲゲの鬼太郎」代表)  
(おまけ「幻の鬼太郎妖怪のルーツを求めて」)
- 11 鬼姫 (忍者<白土三平作品>代表)  
(おまけ「白土三平のびっくり忍法絵巻」)
- 12 高見沢みちる (眉村卓作品代表)  
(おまけ「眉村ジュブナイル 美少女軍団の全て」)
- 13 キングギドラ (東宝怪獣代表)  
(おまけ「ゴジラの敵大百科(昭和編&ゴラス版)」)
- 14 獅駝洞の三の大王 (「西遊記」代表)  
(おまけ「天竺はどこだ!?『西遊記』の最終回アラカルト」)
- 15 ボラー (「鉄腕アトム」代表)  
(おまけ「鉄腕アトムが見た悪夢」)
- 16 マモー (「ルパン三世」代表)  
(おまけ「『ルパン三世』で学ぶ世界の組織・歴史的人物」)
- 17 KING の軍団 (「北斗の拳」代表)  
(おまけ「徹底検証 アニメ版南斗聖拳はどこまで認めていいか?」)
- 18 ブラック・シャドー (「キン肉マン」代表)  
(おまけ「『キン肉マン』と『タイガーマスク』の甘い関」)

#### 番外 映画編

(有川正一、ドレフュス、ポリース夫人、「ローズマリー」の保安官、アリアスとその配下たち、プレトリアス、ヴィイの魔女、ヒル教授、ロボット・マリア、「エル・トポ」の四人のガンマン、徳永美保子、大日本人口調節審議会、火雲邪神)

気が向いたら、これらのコラムについても、こちらで再公開していきたいと思ひます。

環境破壊なんて怖くない

## 環境破壊なんて怖くない

このコラムは、私の昔のホームページの中で、擬似ムック本スタイルの読み物「秘密美少女ドクガール」を連載した時に、その付録エッセイの一つとして、提供したものです。

「秘密美少女ドクガール」本編の内容に合わせて、当時（2000年代初頭）考えられる限りの人類破滅の危険要因に対する私なりの回答を提示してみました。この小文を書いてから、早くも四半世紀が経つ訳ですが、人類はいまだに滅びてはならず、私が指摘した通りになってしまった部分や、全く杞憂だったネタとかもあって、今読むと、なかなか興味深いです。

ぜひ、皆さんも、ここは力を抜いて、どうぞ、お気楽な気持ちで、ご覧くださいませ。

### 「秘密美少女ドクガール」特別コラム 「環境破壊なんて怖くない」

「秘密美少女ドクガール」では、環境破壊によって人類は滅びてしまうのではないかと、言う不安が、作品の重要なテーマとして、大胆に用いられています。

しかし、それって、どこまで本当の話なのでしょう。ハデス・プロジェクト（野民製造計画）なんてものが、実際に実行される可能性はありうるのでしょうか。

ここでは、そんな疑問、及び、地球を脅かす破滅の要因に対して、今の人類がどの程度、対抗措置を持っているのかについてを、作者が分かりうる限りで、説明してゆきたいと思います。

（補記/このコラムは「ドクガール」制作開始時に執筆したものである為、内容的に古くなった部分も沢山あります。人類をとりまく不安の要素は、その後も悪くなる一方であり、特に地球温暖化のもたらす脅威は、今世紀中に北極の氷を溶かしきってしまうのではないかとすら言われ始めています。本当に人類に明るい未来は来るのだろうか？）

#### ●環境アセスメント

実は、2000年初頭、世界各国の企業や団体は、協力して、地球全土の資源の現状を詳細チェックして、未来にどう役立てていくかの一大計画を立案、さっそく調査・分析を開始しました。これを、環境アセスメントと言います。

なんだか、話を聞いて、「ガッチャマン」のマントル計画を思い浮かべてしまったのですが、おおまかな分析が終了するのは、だいたい、3年後の2002～3年あたりだろうと言われていました。

まさか、「人類存続は絶対不可能！」なんて絶望的な事は、恐らく言わないはずだろうと思いますので、私の「ドクガール」の方も、こちらの分析結果を十分にらみながら、今後の話の展開をタイムリーに作っていかうと考えております。

### ●地球温暖化

現在、一番、心配されている環境破壊は、多分、これでしょう。一説では、20年後には、大気中の二酸化炭素の量は、現在の二倍になってしまうだろうとも言われています。

すると、どんな悪い事態が生じるのかと言うと、たとえば、南極の氷が溶けて、大陸の海辺の都市が増水した海の中へと沈んだり、あるいは、惑星規模の気温上昇の影響で、作物の栽培分布場所が変わってしまうのではないかと心配されています。

さて、そうなってしまった場合は、一体、どうなるのでしょうか。

まず、南極の氷が危険量以上溶けてきたかどうかは、観測によって、じゅうぶん、予知できるはずですので、いきなり津波が襲ってきて、町が海水に呑み込まれるなどと言うスペクタクルにもならないだろうと想像されます。その前に、多分、内陸部への居住区大移動計画が、政府指揮のもとに、少しずつ進められてゆく事になるだろうと考えられますが、国によっては、首都が放棄される事もありうるかもしれません。（日本も要注意）有珠山噴火に伴う避難生活の様子が記憶に新しいものと思われませんが、あれに似た状況になるのではないのでしょうか。

もう一つの問題、作物の栽培分布地域の移行ですが、実は、こちらは、もしかすると、人類の食料難にとっては、救世主になりうるかもしれない！？と言うのも、土地が肥沃だったにもかかわらず、気温の問題で農耕の出来なかった不毛の大地が、次々に開拓できるチャンスが訪れるかもしれないからです。

もちろん、そんなうまい話に必ずなるとばかりも断言はできませんので、楽観視せずに、今後の動向を慎重に見据えてゆく必要はあるでしょう。

### ●エネルギー問題

石油は、このまま使い続ければ、あと50年ぐらいで無くなってしまうそうです。しかし、先の二酸化炭素問題とも絡んでいますので、もっと早く、使用を止めなくてはなりません。

代替エネルギーとして、注目されているのが、発電所用の原子力と、家庭用の天然ガスなのですが、実は、これらも、あと50～70年ぐらい使える程度の埋蔵量しか無いらしいのです。

では、どうすれば、いいのでしょうか。

実は、欧州などでは、太陽発電や風力発電類の開発が急ピッチで進められています。そして、日本でも、原発増設計画の頓挫と入れ違うかのごとく、太陽発電や風力発電の試験機の成功が伝えられ始めました。（2000年時点）当初、太陽や風では、気象任せの為、安定したエネルギー製造が期待できないのではないかと心配されていたのですが、これらの試験機でサンプルを取ってみたところでは、必ずしも不満な結果でもない事が分かってきました。

やがて、ソーラーハウスやソーラーカーも普及しだす事でしょう。そうなれば、発電

所の負担も、だいぶ、軽減されるようになる訳です。

何よりも、太陽光や風、潮、地熱などは、実質上、無尽蔵のエネルギーだと言っても、過言ではありません。（だって、それらが無ければ、人類も生きられないもん）こうしたエネルギー源を利用できる術を身に付けたと言う事は、人類も、ようやく、エネルギー革命の最後のステップに乗り出したと言う事なのかもしれません。

（付記／実は、この文面を書いていた矢先、日本政府が、再び、原発増設に着手するとのニュースが耳に入ってきました。政府の時代遅れなエネルギー問題認識に対しては、ただただ呆れるしかありません）

### ●食糧飢饉

豊かな先進国では、実感が湧きませんが、食糧不足は、すでに世界的な問題となってきました。ただ、残酷な話ですが、この飢餓による死亡率の高さは、発展途上国における人口増加の歯止めにもなっていますので、解決しない方が良い問題なのかもしれません。

ただ、もし、食糧不足が本当に深刻化すれば、各国が食糧確保にやっきになり始めますので、死活問題なだけに、ほぼ確実に戦争が起きるはずですよ！ その場合は、飢え死にするのではなく、戦場で死ぬ可能性の方を懸念した方がいいかもしれません。

### ●核戦争（ハルマゲドン）

前述したような資源を巡る小競り合いなら発生するかもしれませんが、全面核戦争になって、地球全土が滅びると言う恐れは、ほぼ考えられません。

米ロの間には、たてまえ上の報復核の決め事がありますが、冷戦時代ですら核の撃ち合いを避けてきた彼らが、今さら、全滅戦争にこだわり続けるとは思えませんし、一方の国がミサイルの誤発射をしても、「報復核」は多分、実行されずじまいで終わる事でしょう。

実は、過去にも、核ミサイルが発射されそうになった危機は、たびたびあったのです。しかし、いずれも、常にすんで回避され続けてきました。人類は、まんざら、自分の武器で死滅するほど愚かでもないのです。この点については、「ドクガール」第6話にて説明したいと思います。

### ●氷河期

地球が暖かくなりすぎるのではなく、逆に、雪と氷に閉ざされてしまう事を心配している人たちがいます。それが、「氷河期の到来」と言うものなのですが、実は、なぜ氷河期になるのかは、はっきりした理由は解明されておりません。（今は十分氷河期状態だ、と言う説さえあります）

ただ、はっきりしている事は、私たちの先祖は、それでも、幾度となく厳しい氷河期を乗り越えてきていると言う事で、だったら、私たちだって、きっと、それを見習えるはずですよ。何よりも、我々は、ご先祖さまたちの持っていなかった科学の力さえ備えているのですから。

（聞くとところによると、氷河期でも、温暖地域は存在し、それなりに住み心地は良いらしいです）

### ●他天体の衝突

恐竜の絶滅原因は、巨大隕石が地球に衝突したせいとみて、ほぼ間違いのないらしいです。

その事が判明した為か、同じ悲劇を繰り返さないよう、今、人類は他天体の動きに対して、異常に過敏になっています。各国の天文台は、互いに協力しあい、宇宙をくまなく観測して、地球に接近する他天体の軌道は、100年ぐらい先のものまで調べ上げてしまっています。

その中には、もちろん、危険なものも見つかっているのですが、およそは、小さな小惑星や隕石のたぐいなので、地球に大接近する前に、宇宙空間で核ミサイルをぶつけて、軌道修正ができるのではないかと考えられています。

映画に出てくるような巨大惑星の突然の衝突などは、絶対、ありえません。地球を滅ぼせるクラスの他天体の軌道ならば、何百年も前に、当然、割り出してしまえるからです。もちろん、そんなものは見つかりませんし、天文台が隠すようなマネをしてたとしても、そんな大きな星でしたら、シロウト天文家でも発見してしまいますので、隠し通される事はないでしょう。

ブラックホールだったら見つからないのでは？と心配する方もいるかもしれませんが、ブラックホールはX線を出していますので、接近すれば、きちんと発見できます。見えないはずのブラックホールの存在が、なぜか、知れ渡っているのは、それゆえなのです。

### ●異生物の侵略

宇宙人の地球飛来は、正式には確認されていません。理由は詳しくは記しませんが、多分、全てはデタラメでしょう。UFOにしても、乗り物でない可能性の方が濃厚です。

これが、異次元人だとか地底人、古代生物の復活などと言い出すと、フィクションの領域であり、出現する前から、その存在を心配するのは、取り越し苦労だとも言えます。

実現する危険性のある脅威的異生物としては、実は、人間自身が遺伝子操作で組み立ててしまった「野民」みたいなものが挙げられるのですが、中でも、間違っ作ってしまいそうなものとして、殺人ウィルスが一番、怖いとも言えます。

しかし、今だって、人類はエイズやらエボラなどの恐怖ウィルスと交戦し続けています。ペストや天然痘などに対しても、絶滅させられずに対抗できましたし、やがては、科学の進歩によって、この脅威をも克服できる日が、早いうちに来るはずでしょう。

### ●オゾンホール

実は、オゾンホールを作る原因であるフロンガスの使用は、すでに全世界で禁止となっております。つまり、もうフロンガスは大気に放出されていないはずなのですが、オゾンホールの拡大は、今なお続いています。

なぜかと言いますと、すでに放出済みのフロンガスが、まだ大気中に漂っているからなのです。それが、全て浄化されるまでは、オゾンホールは消滅しないでしょうし、その時が来るまでは、根気よく耐え続けるしかないでしょう。

一日も早く、オゾンホールの縮小をニュースで聞ける日が、来てほしいものです。

### ●人口問題（少子化）

発展途上国での人口増加の問題は、「食糧飢饉」の項目で述べておきましたが、一方、日本も含む各先進国では、少子化による若い人口の激減に悩まされ始めています。

この件に対しては、なんと、発展途上国の余剰人口を先進国に移住させたらどうかと言うアイデアが本気で検討され始めておりまして、多分、近い未来にこれは実行されるはずでしょう。

日本へ移民してくるのは、予想では、肌の色が似たアジア系や南米系の人々じゃないかと思うのですが、今から、仲良く出来るよう、心構えをしておいた方がいいかもしれません。

### ●ポールシフト

通称「極ジャンプ」と呼ばれています。地球の地軸の位置がいきなり変わると言う現象で、過去にも何度か起きているらしい、とも言われています。

しかし、これに関しては、考えるだけムダです。いつ起きるかは、観測不可能ですし、起きれば、ほぼ人類文明は壊滅するからです。せめて、できる対応と言えば、二次災害として核が暴発しないよう、日頃から、核施設の警戒を強めておく事ぐらいでしょうか。

ポールシフトの心配なんて、しない事が、一番の対策かもしれません。

### ●経済危機

実は、日本が一番、危険な状態だったりします。なぜなら、今の日本の経済は、莫大な赤字国債の上になりたっているからです。言ってみれば、返すあてもないクレジットローンの元で、贅沢をしているようなありさまなんですね。

そのうち、日本が自己破産してしまうのではないかと警戒している経済評論家もいるのですが、もし、実際に日本の経済がつぶれるような事があれば、周辺経済大国も、飛び火して没落する恐れがありますので、まず、そんな事は起こりえないでしょう。きっと、いつまでも、この赤字国債をズルズルと引き摺って、日本はしぶとく生き抜いてゆけるものと思われれます。

むしろ、どん詰まりのあげくに、世界規模の経済破綻が起きてしまう日が来る可能性をこそ心配すべきであって、そんな時が来てしまう前に、現状の経済概念を作り直して、対抗措置をとっておいてほしいものです。

### ●フリーメンの三大環境破壊対策

それでは、もし、上記のような破滅要素に対して、人類がうまく善処しそこねた場合、はたして、本当に「ドクガール」みたいな対策を政府や指導者たちは採用するのでしょうか。

まず、人類を他天体へ送り込み、別惑星や宇宙ステーションに植民地を設けるというアイデアですが、これは、ほぼ採用見込みはありません。なぜなら、予算がかかりすぎるからです。テクノロジー的にも、実現には程遠い状態のはずでしょう。

しかし、「野民」を作るなぞと言う非人道的な行為も、たとえ、バイオ技術が追い付いたとしても、さすがに決行はしないものと思います。ただ、大地を汚染するダイオキシ

ンや環境ホルモンに対抗する為、細胞強化剤を常時着服する事が義務化されるような日は、いつか訪れるようにはなるかもしれません。

さて、そうなると、現実化の見込みが一番高いのは、自然不要の万能人工都市の建造ではないかという事になってきます。人工的に酸素を大量派生させ、無機物より新鮮な食物を加工する……。そんな未来の科学が、実は、もう完成されかかっているのかもしれない。

#### ●人類の行き着く未来

最後に、人類がさまざまな不安要因を蹴散らして、その科学がどこまでも進化していった場合、どうなるであろうかを推測したいと思います。

実は、私（作者）が考えているそれとは、まさに「あそぼーヨ！」（注・当時、私が公開していたネット絵本）に登場させた宇宙生命チェイサーに他ならないのであります。

科学技術の最終到着地点として考えられるものとしては、永久機関による無限の動力源確保、原子レベルでのあらゆる物質の合成術、もっとも合理的な状態（エネルギーや精神力）でのシステムや情報の構築、などがあげられます。

しかし、これらの事ができると言うのは、まさに神様や魔法使いになったも同様だと言えませんか？ それって、夢にも見た、素晴らしい未来なのではないのでしょうか。

だからこそ、いつか、そんな世界が来てほしいゆえに、今、我々は、つまらない原因などで、この素敵な人類という生き物を滅ぼしたりしてはいけない訳なのです。

---

特撮学ets・補記

---

著 者 anurito（半日天下）

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---